
サメと私と、七不思議。

樹嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サメと私と、七不思議。

【Nコード】

N1686Q

【作者名】

樹嵐

【あらすじ】

高尾香月^{たかおかずき}は花紫学園の一年生。成績も家族構成も言っちゃって平凡の彼女の唯一の特徴は左右の目の色が違うこと。平凡な高校生活を夢見る彼女のお邪魔虫は、日本人ではあり得ない天然の青い目をしたクールな青年、付月サメ^{ふづき}。二人には誰にも言えない秘密があった。それは：サメが香月の左目だと言うこと。不可思議な関係の二人が手を出すと必ず災いを呼び起こすという花紫学園の七不思議の秘密に巻き込まれていく。

物語のはじまりのはじまり

かりかりかりかり

ノートに走るシャープペンスルの音が、せわしなく響く放課後。期末テストまったただ中の図書室は普段とは一変し、静寂を保っていた。誰もが机に広げられた難解な問いに頭を痛めていた。

誰もが少しでも良い点を取ろうと前日のあがきをしているときに、その少女はまるでそんなこと気にもとめないかのように書棚を歩いていた。

そして、それをみつけた。

何かしら

かすかにそうつぶやくと少女は近づく。

ピンポン玉？誰かの落とし物かしら

よく見るとそれには赤い筋があった。

野球ボール？

それを拾おうとしゃがみ込み、手を伸ばす。すると、くるりと

それはこちらを見た。

それは、目玉だった。

ストラップが落ちたのね

少女はそう結論づけると手にした実物によく似た目玉とみつめあう。それはよく澄んでいて、その瞳に彼女を映した。この手のグロテスクなものはあまり好きではなかったが、少女はそれを気に入った。立ち上がると、誰も見ていないのを確認し、そっとバッグにしまった。

素知らぬ顔で書棚の林を抜けようとしたとき、本の隙間からカウンターに座る図書委員と、目があった、そんな気がした。

物語がはじまるその前に

「ねえ、だ・か・らさあ、おしえてくれたっていいじゃん」

「そうそう、あたしら、トモダチじゃん」

テスト最終日の放課後は、どこもかしこも騒がしい。だから、きつと人が困っていることに誰も気がつかず、さっさと帰ってしまうのだ。決して関わりたくないわけじゃない。そんなどうでもいいことを考えながら、高尾香月はじりじりと追いつめられていた。花紫学園一年二組、部活は帰宅部の図書委員会所属。成績は中の中でいったて普通。生い立ちも家族構成も別段取り立てて書くこともない。あるとすれば左右の目の色が違うくらいのみさに平凡な女子生徒であったが、入学以来、ことあるごとくこのように追いつめられていた。目の前には赤点と、きつとトモダチなんだろうと思わせる軽そうな茶髪の子が二人、さっきから漢字を使わずにしゃべっている。一年生は上履きの先が水色だから、上級生なのだろう。もちろんはじめて見る顔だからトモダチではない。

「あの、でも私、本当に知らないんです」

一生懸命さをアピールしながら否定する。最後の半歩を下がると、背にドアが当たった。そのドアをくぐれば、平和が帰ってくる。そう分かっているだけに、すぐに壊れてしまいそうな薄いドアが恨めしかった。きつと中にいる人間は助けてくれる気などさらさらないのである。

「なんなあん。こいつ、ムカツクう」

「あんたあ、サメくんのおさななじみなんですよ。いえぐらいおしえてくれてもいいじゃあん」

お願いが一変して脅迫になる。

香月の平穏な高校生活を奪った男の顔が、脳裏に浮かぶ。付月サメ。クールな顔立ちと、日本人としてはありえない青い目。それに相応しい冷たい性格がもう最高、と学園中の女子を虜にした男で

ある。だが香月はそんなクールな男がめっちゃくちな甘えん坊だと言うことを知っている。というか香月がいないとサメは生きていけないのであった。そんな頭の痛い相手のことを考えたせいか、目の前でさえずる歩く鳥の巣のせいには分らないが、香月は痛む頭を押さえ、小さく息をついた。

「そこでなにをしている」

ため息と同時に聞こえたのは低い男の声。軽々と先輩たちの頭の上から、香月を見下ろす。一八〇センチに少し足りないらしい身長だから、当然かも知れないが、見下されているようで香月は嫌だった。

「あ、サメく〜んV」

「ねえ、あそびにいこうよお」

語尾にハートをつけて、サメの周りにべたべたくつつく先輩に、これ幸いと、香月はさっさと薄いドアをくぐり抜けた。

ぱたん

薄いドア一枚隔てただけで、空気は豹変する。生ぬるかった空気も一、二度下がっている。神社やお寺を訪ねたときのあんな神妙な雰囲気は辺りに漂っていた。

「はあ、生き返ったあ」

ドアにもたれかかり、盛大にため息をつく。さっきみたいな尋問も、サメファンの嫌がらせもこの部屋にいるかぎり安心だった。何せここは学園の誰もが恐れる場所、司書室であるから。

「大丈夫、高尾さん」

「あ、はい。大丈夫です」

抱えたバッグをテーブルに置くと、部屋の奥のデスクに声をかけた。そこにいるのはこの部屋の主で、司書の中川であった。それは良かった、と穏やかにいう。だが、この部屋が恐れられているのは彼のせいではない。

「えーと、今日はまだ委員長は来ていないんですか」

きよろきよろと見渡す。図書室とはガラスで区切られているため、

司書室にいながらそちらも確認することができた。だが、貸し出しカウンターにいるのは当番の委員の生徒だけである。

「あれ、図書室にいない？ さっきそっちに行ったけど」

もう一度確認するのも面倒だったので、香月は適当に応じると、机の上の今日の作業を見て、うげ、と可愛くない悲鳴をあげた。そこにあったのは絶対さっきまではなかったものである。

「ちょっ。何、勝手に入っているのよ、あんた」

なんだ、と相変わらず不機嫌そうに眉間にしわをよせて、椅子に座っているのはサメであった。やばい、と青ざめる香月は、サメのバッグを持ち主に押しつけると、腕を引っ張って立ち上がらせようとした。

「ほら、早く立ちなさいよ。ここは勝手に入ったら駄目なんだからね。あんたも知ってるでしょ。委員長のこと」

委員長。そう、その名を聞けば誰もが恐れる、学園一の奇人。入学当初からなるべくしてなった図書委員で、図書室を我が物顔に支配した人物だった。人は委員長を図書室の主と呼ぶ。

「俺はいい」

「いい？ いいって何がよっ。分からないこといってないで、さっさとでていく。でないと……」

口聞いてやらないんだから、と続けようとしたとき、背後から聞こえたのは恐怖の根元であった。

「ほう、香月君、どうなると？」

びっくう……と、文字で書けそうなほど、震えた香月はおそるおそる背後に立つ人物を見上げた。

「あ、委員長。いらしたんですか」

「ああ、いらしたとも」

ひきつった笑顔を浮かべる香月に悪魔が微笑む。

（ああ、黒い尻尾と翼が見えてきそう）

これは決して大袈裟な驚きではない。現図書委員長、風切文子についての異業伝は数知れない。香月が入学してはじめて目にした異

業は、家庭クラブ事件であった。再三の図書返却の要請に従わない、家庭クラブ所属の数名の生徒にしびれを切らした委員長が、一夜にして家庭クラブが作った菜園を見るも無惨なものにしたのだ。なにせ、中庭に作られた三メートル四方の菜園に一夜にして現れた墓地群に人々は恐怖した。アイスの棒で作られた墓碑には、今まで図書室で貸し出したまま戻って来ることの無かった本の書名が書かれ、その冊数分建てられていた。そして、その下には魚の骨が埋められていた。その後、家庭クラブをはじめ、返却日を過ぎた本が山のように戻ってきたのである。

（きっと私も埋められる）

本気で香月が涙目になりかけたところで、見かねた中川が助け船を出した。

「それよりも、取材は結局、許可したの？」

「え、取材？」

「うん。新聞部が夏休み前に「学校の七不思議」ってベタな案で新聞を書くらしいよ」

「本当にベタだな」

サメの意見に香月は、うん、うん、と首を縦に振った。委員長は、図書室でなにやら調べている新聞部の部員たちをガラス越しに、敵視していた。その目からは今にもレーザーがでそうである。

「あ。でも、そのおかげで図書の利用率が増えるかもですよ。あれ？でも、何でここなんですか？図書室にまつわる不思議ってあるんですか？」

「俺も知りたい」

ぼそっとつぶやく男に、いつまでいるつもりよ、と肘打つもサメは一向に気づかすにいます。とことん居座るつもりである。香月はこめかみに青筋を立てて、知らないふりで、サメの足を思い切り体重をかけて、これでもかとはかりに踏みつけた。

「っ」

それでようやく少ししかめるだけなのだから、この男、一体ど

んな神経をしているのやら。

「ふむ。二人は意外にいいコンビだな」

右手を顎に当てたお気に入りポーズで鋭いコメントを入れる。

「噂ではサメの片思いらしいが」

その噂間違ってますよ、と心の中でつつこむ香月を当然スルーする。嫌な汗が流れるのを感じる。隣の涼しげな男のせいで、なんでこんなに苦勞しなくちゃいけないのよ、とじたんだを踏むのもデフォルメされた頭の中のちっちゃな香月であった。

「まあ、この私の目をごまかすことはできないな。なにせこれとはもおもしろいことだよ。ふっふっふっ……というわけで来てもらったのだよ。付月サメ君」

「ん？……何」

あくまでクールに呼ばれたから答えてみた調で返すサメに、ずびしっ！と委員長は指を突きつける。動くたびに効果音がどこからともなく聞こえてくるのは、香月の気のせいだろうか。中川はさして気にせずに、仕事を続けている。ガラスの向こう、図書室では、気になるが、目が合うと不幸になりそうなので、みな何もないようにしている。

「結論からいうとだな。君たちは同一人物だ」

ざぱーん。どこかの映画のはじまりのように、委員長の後ろで飛沫がたった。香月は縮こまりながらも小さく反論する。

「何を無理なことを。委員長、どうみても私と彼は別人です」

「それは一般論だ。そして一般論とは、人間が普通という定義の中で生きていくために作ったもの。この世に起こらないことなどないのだ」

「……」

「いいかね。なぜ私が君たちを同一人物と考えたかというのだ。この発端は、サメ君、君が読んでいた本だ」

おもむろに委員長はサメのバッグをひったくると、勝手に開け、中に入っていた本を取り出す。でてきた本は2冊。共にハードカバー

―だった。

「見たまえ、香月君。この本は以前、正確な日付は省くが、君が借りた本だ。そして、私をはじめて見たとき、彼が読んでいた本もまた然り。……いや、何も言うな。わかつている。同じ本を読むのはよくあることだというのだろう。それは私もわきまえている。だが、さらに調べると」

どこから取り出したのか、桃色の一年用の個人カードが2枚、委員長の指に挟まっていた。ちなみに二年は橙、三年は青だ。

「君たち二人の貸し出し数は、だ。香月君、君の方が四冊多い。そして、その内容だが、時期をずらしているが、借りている本は全てが一致した。十冊二十冊の本が同じになるのが普通としたら、五十冊以上の本が全て一致するのは異常だ。ストーカーならまだしも、いや、もしかしたら、付月サメは新種のストーカーか？ いや、だが、そうすると……」

そこまで熱弁していた委員長だが、ふとみるとさっきまで二人がいたところにその姿はなかった。真顔で固まる委員長に、「二人ならさっきこそそででいったよ」と中川が説明する。

委員長は髪をくしゃくしゃ掻きながら呻くと、いそいそと仕事の用意をしはじめた。

ところかわって、こちらは裏校舎の非常階段二階。クラスがある表校舎とは異なり、特別室しかない裏校舎の非常階段には人影は少ない。いるとしても最上階のブラスバンド部ぐらいである。そんなわけで、香月はサメに人目を気にすることなく文句を言っていた。ただし、誰に聞かれるか分らないので、ぼそぼそ小声でだ。もし人目に触れたら逢い引きの現場と間違われるのは必至だろう。そんなことに気がつく二人ではなかったが。

「だからあ、いっつつつつもいってるでしょう。学校では近づかないでって」

非常階段に正座させられたサメはいつものクールさはどこへやら、

しょんぼりと耳をたれている。

「あんまり言うこと聞かないなら、あんたのこと無視よ。無視。一生、口聞いてやらないんだから」

べー、っと舌をだす様子は、本当に高校生かと疑いたくなったが、サメはさも恐ろしげにぶるぶると顔を横に振った。眉間に皺を寄せたままの不機嫌な顔でその仕草は、可愛いではなくむしろ滑稽であつた。

「いやだ。香月に嫌われたら、俺、生きていけない」

真顔でそういうサメに香月はため息をついた。これが本当にかっこいい男の口から言われていたら……。そう思うも、目の前にいるのは生身の、一般の常識で言う所の人間ではなかった。

「はぁ、上手くごまかしていると思ったのに。やっぱり非常識者同士、臭いで分かるのかなぁ」

見上げた空は青い。梅雨の合間の快晴であつた。だが、香月の胸の内はどんよりと思い雲がたれ込めていた。

高尾香月と付月サメの関係は実に複雑怪奇であつた。何がどうしてそうなったのかは当の二人には説明できないことだつた。実のところ付月サメは、香月の左目なのである。

それは香月がまだ幼い頃、当時、子供心に大好きだつた従兄のお兄ちゃんと仲良く手をつないで、買い物に出かけたときのことだ。細い、歩道すらない道路を歩いていたとき、出会い頭にぶつかった車が、スピードの出しすぎで、壁にはじかれ二人につっこんだ。そんな事故があつた。気がついたとき、香月には事故の記憶がなく。左目の色がサメ同様青くなってしまったのだ。従兄のお兄ちゃんは、ぶつかった場所が悪く、病院に来てまもなく亡くなった。

香月は子供心に自分のせいでお兄ちゃんが死んだのだと、夜な夜な泣いていた。そんなある日、サメが現れるようになったのだ。従兄弟のお兄ちゃんそっくりな自分のサメに、最初はびくびくしていたが、子供というのは現金なもので、すぐにうち解けてしまった。はじめは、元気になった娘に両親は喜んだが、時たま一人で誰かに

向かって笑いかける娘に恐ろしくなり、小学校を出るまで香月は精神科に通っていた。サメが香月以外には見えないということに気がつくのが、遅かったからである。おかげで、周囲から奇異な目で見られるようになり、それを払拭するために中学では、サメを無視したが失敗。高校ではと勢い込めば、なぜだか知らないが、同じ学年に入学していて、あげくに誰がつけたのか付月サメなどと名前まで持っている始末だった。そして、現在に至る。

「香月は俺が嫌いなのか」

頭に手をあて、何度のため息をもらす香月に、サメは無表情で上目遣いに尋ねた。

「別に好きでも嫌いでもないわよ。普通かな」

「普通……か」

あまり表情は変わらないが、ショックを受けたらしく、声が沈む。何、傷ついているのよ、といじめっ子な気分陥った香月はどうフォローしたものか悩んだ。

「ほら、暗い顔しない。笑って、笑って」

背をポンポン叩いて、元気づけようとしたが、いつもの不機嫌そうな顔に出くわし、しまった、と後悔の悲鳴をもらした。いつだったか、笑うと本当に優しくなった従兄の様に嫌だといってしまったことがあった。それ以来、サメは笑わなくなったのだ。

「えーと、ほら、……」

「誰か来る」

「そ、誰か来るって、誰よっ！」

立ち上がったサメは香月から離れる。サメが階段を上りきると同時に、その人は姿を現した。

「あら、失礼。もしかしてお邪魔したかしら」

黒いさらさらとしたロングヘアが、振り返った拍子に、ふんわりと揺れた。冗談めかしくくすすと口元を笑わせる仕草も、一般人とは一線を画していた。

「いつまで口を開けているつもりだ」

サメの呆れた口調が降ってくる。

（何よ。偉そーに。さっきまでこの世の終わりみたいなこと言ってたくせに）

慌てて口を塞ぐと、ころころ、とサメの隣に立つ生徒は口元に手を当て笑った。

「仲がいいのね。二人とも。やっぱり幼なじみね」

「そんなことないです。あんな顔だけ男と幼なじみになった覚えなんかないですから。へ、変な誤解しないでくださいよ、槇先輩」

「残念だわ。『学校のアイドルに恋人発覚』なんて恰好の記事になると思ったのに」

槇鏡子はそういうと、ころころとまた笑った。学園一の才色兼備、高値のもとい高嶺の花は、新聞部の部長であった。同好会へ降格の危機にあった新聞部を立て直し、購読率九八パーセントにまで導いたのが、彼女である。ちなみに一部五〇円である。

「そういえば、先輩。今度『学校の七不思議』を取材しているって聞きましたか」

「ええ、そうよ。週末にはもう七月よ。夏といえば怪談。怪談といえば学校。学校といえば七不思議。そうでしょ」

「……はあ」

実はおばけが大の苦手なんです。とはいえないので、香月はあいまいに返事をした。新聞が発行すればしばらくはそれが話題の中心になる。

（ああ、嫌だ。おばけが嫌いすぎて、ETで泣いたことが友達にバレませんように）

心の中でそうつぶやくが、きっと知られてしまうだろう。正直すぎて嘘がつけないのが香月のいいところであり、その逆でもあった。「どうせ、ただの作り話だろ」

ぽつりと落ちた興味なさそうな声に、挑戦するかのように槇は見上げる。その表情は不敵に微笑んでいる。

「もしかして恐がり？他の学校がどうかは知らないけど、ここは違

うのよ」

サメを真っ直ぐに見つめたまま、槇は続ける。サメの眉間の皺が、わずかに深くなる。香月は耳を塞ぐべきかどうか迷いながら、そんな二人を階下から見上げていた。

「あなたも一つぐらいは聞いたことがあるでしょう。そう例えば、手に取ると必ず死ぬ本、とか」

ふるふる、知らない知らない香月は首を横に振った。極力この手の話題は避けてきたのだ。走る理科室の人体模型とか、目が光るベートーヴェンなんて、想像しただけで倒れてしまいそうである。そんな階下の気も知らずに、上の二人は勝手に話を進めていく。

「ああ、噂ぐらいは」

先輩にすら、口調を変えない傲岸不遜の男は、軽く頷くと、がたがたと体全身で恐怖を露わにしている香月をちらっと見た。極度の恐がりだからさっさと話を打ち切ろうとしたのだが、どうやら言葉の選択ミスをしてしまったようだ。

「あれは少なくとも事実よ。……数年前に、この地域で高校生が次々と自殺をはかったことがあった。もちろんこの学校の生徒にも亡くなった人がいたわ。公にはされていないけど、自殺した生徒は決まって同じ本を数日前に読んでいたそうよ。それもこの図書室の本を」

「……」

「だから、他の話もあながち嘘とはいえないのよ。どんな事件が隠されているのか、わからないもの」

そういう終わると、鮮やかな笑みを残し、槇は階段を下りていく。ちょうど香月の横を通りかかったとき、ふらっと足から力が抜けた香月が、槇にぶつかった。

「大丈夫？ 顔が真っ青よ」

腰が抜けた香月はぺたんと床に腰をつけ、魂を飛ばしていた。

「サメ君、ちょっと来て」

香月の側にしゃがみ込み、サメを呼ぶために槇は後ろを向いた。

ちょうど側に置かれた櫛のバッグから、それがこちらを見ていた。

（ひっ。……め、目玉）

学園のマドンナには相応しくない持ち物に、香月はあっけなくノックアウトされた。そのまま、意識が遠のいていく。どこかで誰かの声がした。

『そこにあったか』

きつとここが物語のはじまり

気がつけば、そこは保健室……ではなく、図書室のソファだった。顔を動かすと、どさりと、水に濡れたタオルが絨毯の上に落ちた。

「気がついたか」

頭の上の方から降る声に、首をそらすと、ふっふっふっ、と意味のない笑いがした。眼鏡の奥の目はもちろん笑ってはいない。

「い委員長……」

驚きよりも恐怖に声を上げた香月を無理矢理起こすと、首根っこをつかんで委員長は隣の司書室に向かう。試験最終日だけあって、利用者がほとんどいないのは幸いだった。偶然、居合わせてしまった数人も、香月と目が合うごとにそらしていく。もう見て見ぬ不利はおなじみである。

「さて、なぜ神聖な委員会の仕事ををさぼったのか聞かせてもらおうか。香月君」

作業用の四人がけの机に相向かいで座ると、開口一番、委員長はそうのたまった。

「えーっと、それは」

「風切さん、どうして倒れてたのか聞くのが先じゃないかい」

三人分のお茶を手にし、それぞれにさしだす中川に、感謝の気持ちをこめて頭を下げる香月とは反対に、ふんぞり返って委員長は茶をすする。そんなことも気にしないで、自分のデスクでコーヒーを飲む中川は人間ができている。しかもカップに入っているのはいつものコーヒーではなく、体調を気遣ってホットココアだった。コーヒーを飲まない委員長はいつもの緑茶である。マイ湯飲みになみなみとつがれたお茶をおいしそうに、ずずずずずず、と飲んでいる。本当に女子高生かと疑いたくなる一瞬である。

「中川さん、そんなことはとうに付月サメに聞きましたよ。あの新聞部の植鏡子に七不思議の話を聞いていたとか。極度の恐がりのせ

いで腰砕け、失神したとか。は、どうせETでも怖くて見られない、とかいうんだろうっ」

がたん、ぴちゅん。勢いよく置かれた湯飲みから、中の液体が飛び出す。慌ててタオルで拭く委員長は、本があつ、本があつと、隅っこがちょっぴり濡れた、岩割文庫の目録を両手に持って、右往左往した。

「な、何でそのことをっ」

「え、マジで」

ぴたりと動きを止めた委員長は、また席に着く。そして、再び、ずずうと、茶をすすった。その間に、はい、と頬を赤らめ、香月は頷く。

「ふん、どうせ「手に取ると必ず死ぬ本」についていわれたのだろう。何せ私も聞かされたからね。あげくにどの本か、だど。・・・悪いのは死んだ奴らだ。それを本のせいにするなっ」

がたんっ。わざわざ湯飲みを手にとり、持ち上げ、叩き置く。いわれのない本を犯人扱いされ、委員長は憤慨する。まるで仕事帰りのサラリーマンが、屋台のおでん屋で酔っぱらって愚痴を言っているのに似ていた。

「それで、さっき来たとき、新聞部の方にすごい目をしていたんですね」

「それは別の話だよ」

「へ？」

酔いどれサラリーマンと同じく、机に突っ伏しぐちぐちと何やら言っている委員長をスルーして、香月は中川に向き直った。

「香月さんは、あ、怖い嫌いなんだよね。だったら、七不思議にどんな話があるかは知らないよね」

「はい、知りません。何があるんですか」

香月の素直な問いに、中川は話していいものかちよつと思案した。「大丈夫ですよ。ここ、委員長がいますから。絶対おぼけなんか来ないですから」

こぶしを二つ作り、力説するが、おぼけすら避けて通る委員長はいまだ酔っぱらいサラリーマンを演じている。今はちょうど泥酔したところのようだ。ときおり、かつきい、かえったぞお、と寝言まで再現するサービス付きである。それを見て、香月と中川は二人そろって苦笑した。

「じゃ、話すけど、僕も全部は知らないんだ。だから残りは他の人に聞いてくれる」

「はい」

ごくり、と唾を飲み、香月は耳を傾ける。

「まず、「手に取ると必ず死ぬ本」はいいよね。これは最近あった事件のせいで結構有名な話だね。それから、「図書室の主」」

そこで、香月は委員長を見た。すでに七不思議入りをしたか、と心の中で拍手を送る。

「風切さんは関係ないから」

「あ、そーなんですか」

でもきつと生徒の半数はそう思っているのだろうと、香月は確信した。

「あと知っているのは、「徘徊する黒い影」と「神隠しの絵」かな」「えーと、今、四つですからあと三つですか」

指折り数える香月は、内容が分からないこともあって、どちらかというと楽しそうであった。

「「文字食う虫」と「恐怖の大王」だな」

ようやく元に戻った委員長は、つまらなそうにそう言った。

「これで六つ、と。あと一つで全部ですね？」

恐い話だというのに、あと一つでコンプリートだと思うと、そちらの方が楽しいらしく香月は喜々として二人を見た。

「委員長、あと一つ知ってますか？」

「さあな」

「ええっ！ 気になります。知っているなら教えてくださいよ」

ぷうっと頬を膨らませる香月に、委員長はやはりやる気なくコキ

コキと首を回している。中川も知らないよ、と笑うと、パソコンに向かい仕事を始める。

「委員長う、ヒントでもいいから教えてくださいよ。仕事しますから」

ふむ、委員長は横目で、机の隅の方に積み上げられた本の山を見、背後の棚に置かれた装備待ちの書籍を頭に思い描いた。確か先に借りた本がざっと一〇冊あったはず。時計は閉館まであと三〇分を告げていた。にやり、と笑い黒い尻尾を出す。

「ヒント、か」

わくわくと目を輝かせる香月に、お気に入りの顎に右手をあてるポーズをし、もったいつける。

「そうだな。目に関係する話になるはず」

「目ですか」

「そう。でもそこまでだ。はい、これ仕事。ちゃっちゃとカバーかけるぞ」

ハードカバーの一冊三〇〇ページは軽くある本を目の前に、一冊、また一冊と積まれ、香月は顔を青くしていく。まだまだ修行しはじめて三ヶ月足らずの香月には、三〇分で仕上げるには無理な冊数であった。しかも手を抜けば鋭い視線と、容赦ない言葉が飛んでくるのだ。

「うう、残業だあ」

悲嘆にくれる香月にさらなる追い打ちがくる。

「その前に、返却図書の配架を手伝え。配架がたまってるぞ」

は、いい、と元氣のない返事で、香月は図書室に移動した。

「返事は、はいっだ」

どこの体育教師だと、つつこみたくなるような説教をする委員長に、中川は、ぷっと吹き出した。じろりと睨む委員長に、何でもないと、片手を振った。

「それにしても、良かったのかい」

「何がです」

一応、教師に対してはそれなりの礼は取るらしい。

「分かってるくせに」

そういったが、それ以上中川はその話に触れなかった。委員長も何もなかったかのように図書にカバーを掛けていく。

香月はだから最後まで気がつかなかった。委員長が七つ目の話を未来形で話していたことに。

きーんこーんかーんこーん

六時間目終了のチャイムが鳴る頃には、大会間近に控えた部が残っているだけで、学校内にはほとんど生徒の姿はなかった。そんな時間に、槇は誰もいなくなった校舎を一人、行くあてもなくふらふらとさまよっていた。まるで托鉢をする坊主のように左手を胸の前に出し、何かを持っている。手のひらに乗っているのは香月が目にしたあの目玉であった。まるでその目玉が本物と同じく見えているように、槇は目を閉じて歩いていた。実際、槇にはぼやけた像が、手のひらの目玉を通して見えていた。ピンぼけした像のせいで、足下がおぼつかず、真っ直ぐ歩けない。

ぎょろり

目玉が独りでに動く。

像が映すのは三人の少女。一人を囲むように、二人が立っている。囲まれた少女の手は赤く濡れていた。

目はまた動く。

窓が一枚割れていて、廊下に血が点在していた。窓の外では赤く色づいた葉が見える。

かつて、秋に割れたガラスで手を切った人がいた。

目玉の像はいつの間にか闇になっていた。

槇はしばらく目を閉じたり開けたりしていた。頭がくらくらする。はじめて目玉の像を見たときよりも、いくぶんそれは良くなっていたが、それでも吐き気がした。ひかき棒で胃液をかき混ぜられ

るような、何とも表現しがたい気持ち悪さだった。

「五十七分、か。だいぶ長くなったわ」

像が見える時間は、見るたびに少しずつ長くなった。少しずつ目玉になれていく自分に、移植された臓器を思い浮かべ、槇は笑った。嘲笑などではない純粋な笑みだった。

（これさえあれば、おもしろい新聞がかけるわ）

目を閉じた槇の脳裏にはじめて目玉が見せた光景が浮かぶ。うつとりとしばらくそれに陶醉すると、槇は軽くステップを踏みながら昇降口に向かった。

（またあんな光景が見られるかしら）

淡い希望を胸にする槇の背後に黒い影がゆらゆらと揺れていた。

七月に入るとカレンダーを見るのが楽しくなるのは生徒ならではの感覚だろう。香月も指折り夏休みまでの日数を数えるのが、毎年この時期のささやかな楽しみであった。が、今年はそうはいかなかった。

返却棚に返された大量の本を所定の棚に戻しながら、香月は何度も目かも分からない泣き言を口にした。

「委員長のばっかぁ。なんで夏休みまで委員会活動があるのよぉ」

六時間目は一学期最後の各委員会の会議だった。委員会に入っていない生徒は地獄のワックスがけだ。あの得体の知れないオレンジのぶよぶよしたヤツから逃れられたのがそんなにうれしかったのか、満面の笑みででむかえた香月だったが、時間が経つに連れて、その顔は泣き顔に変わった。それも全て図書委員に配られた夏休みの当番表のせいだった。

「だいたいさ、図書委員って一クラス二人でしょ。一学年七クラスだから、一四人。で、三学年あるからぁ……えーと、一四×三だから」

「四二人ね」

突然聞こえた横からの声に、ひっと香月は首をすくめた。バランスを崩し、積んだ本が落ちそうになったが、間一髪で落とさなかったのは、日頃の委員長の教育のたまものであった。

「なんだ、槇先輩か」

「なんだとはひどいね。それともサメ君の方が良かったかしら」

「絶対お断りです」

迷いもなくきっぱり断ったのは香月に、何がおかしいのか槇はころろ笑った。

（私、槇先輩にいつも笑われているし）

手にしたもう凶器としか思えない暑さの本を棚に戻しながら、香月はちらっと槇を見た。気が小さいのですぐに視線を棚に戻す。さっき戻した本の背と目があった。

『死体を愛す』

黒いカバーに白と赤で書かれた文字。ご丁寧に赤い「愛す」の文字は滴る血のようになっていた。

（うううう……委員長、何、こんな本を頼んでいるのですか）

図書室には購入希望依頼票というありがたい紙がある。この五センチ四方の紙に、高校生にはなかなか手に入らない高価な本の名前を書いて箱に入れると、あら不思議、たいていの本が購入してもらえるという、すばらしいシステムが存在した。なおかつ、新着図書としてお披露目を終えた後、一番に読めるという特典付きである。だが、ほとんどの本が、委員長の職権乱用の餌食となり、新着図書になる前に読まれるのであった。

（うううう……アメリカ人は、恐怖と殺戮が好き）

アメリカ文学の棚にその本があるだけで、アメリカ人が恐怖と殺戮が好きとは限らないことをここに宣言しておく。

「それで、四二人がどうしたの」

隣のイギリス文学の棚で本を探しながら、槇は話を切りだした。

「あ、それですか。……そうだ、聞いてくださいよ。先輩。委員長ってひどいんですよ」

「学園一の奇人がどうかしたの」

「図書委員の夏休みの当番がクラスごとに一日ずつなのに、たった二人だけ違うんですよ。ま、委員長はいいんですよ。好きでやっているから。なのにい、なのにい、残りの一人があ」

「あなただったの」

香月の言葉を引き継いだ槇に、香月は何度も首を縦に振った。七分の一つてすごい確率なのになぜ自分が選ばれたのか、それが納得いかなかった。公平にくじ引きか、副委員長にさせればいいのに、なんで入ったばかりの役付でもない自分に白羽の矢がたったのか、それが香月には不思議で、また悔しかった。

「贅になったのね」

ふっと笑んだ槇の顔はとても自然の笑みでだったが、どこか、うつくしいはずの顔が香月には歪んで見えた。それはとても背筋が凍る笑みであった。

「そそうですね」

槇の口から出た言葉が、お嬢様を地でいく少女に似つかわしくなかった。声が震えたのもそのせいだと香月は思った。

「ところで、あなた。お名前は？」

「あ、はい、高尾香月。一年二組、二二番です」

槇の質問に、香月は赤面した。相手が有名だったので自分は名前を知っていたが、槇にしてみれば名前も知らない後輩に勝手に名前を呼ばれるのだ、きつと礼儀知らずだと思われたに違いない。

「そう、高尾さんね。この間は、ごめんなさいね」

「あ」

そういわれて、香月ははじめて槇と話をしたときのことを思い出した。自分で七不思議の話を振ったのに、最後には失神してしまったのだ。もう、情けないやら恥ずかしいやら、いろんな気持ちがちや混ぜになり、香月はパニック状態に陥った。一番の心配は、委員長のようにあれを知られたら…ということであった。ちなみに、委員長もあれがカワイイと形容されるのが不思議らしい。

「あんなに恐がりだとは知らなかったの。あのあとサメ君に叱られたのよ」

「へ？ あのストーカーもどきですか」

寝耳に水だ。というよりも、倒れたあの日からサメを見かけていないことに、香月ははじめて気がついた。きつと脅しが利いたか、しばらく身をひそめているかだろう。前者だとよいのだが、入学してまだ夏休みにもなっていないのに、そんなことをもう何度思ったか、子供を持つ心境と似ているのかしら、と小首をひねる香月であった。

（そういえば、あいつはなんでみんなに見えるようになったのかしら）

「そうよ。彼って優しいのね。見かけで損をするタイプみたい……それにしても、ひどい言いようね。それとも幼なじみだからそんなことをいうのかしら」

槇の言葉をほとんど香月は聞いていなかった。考え事をするとな人の世界に入ってしまうところは委員長と同じであった。違いは自覚があるのとそうでないだけである。

「それにしても残念ね。次の新聞を見てもらえないなんて」

「う、あ。み、見ますよ、もちろんちよつとは。本当にちよつとですが。気になる不思議もありますし」

制作者本人を前にして、見ないとは、とてもとてもいえるような香月ではなかったが、ちよつとを連発するのも失礼だとは気がつかなかった。こういうとき槇のように気の利いた口が利けたらと、うるうると心で涙を流す香月であった。でも、実際に新聞を読めるだろうか？ 読むと言った以上、一行でも目を通さないと失礼だろう。それよりも、新聞が発行された後はその話題で持ちきりになるだろう。どうやって抜け切れればいいのだろうか。香月の頭にはまだ起こっていない不安で一杯となった。

「気になる話？ どれが気になるのかしら」

もうこの話はお終いに……そう心で叫び、口は従順に動く。

「え、と。図書室の主って話です。委員長と関係ないって言うけど、委員長もそう呼ばれていますから。気になりますて。……えーとそれから、七不思議ってなんでできるんだろうとか」

「何で？」

「う、ごめんなさい、変なこと言ってしまったて。でも、うち、お母さんもおばちゃんもこの学校を卒業したんですが、七不思議の話が違うっていうので、どうしてかな、と気になったんです。やっぱり時代の流れとか、共学になったこととかが関係しているのかなんて」

興味深そうに槇は香月の言葉を聞いていた。

（確かに。七不思議が今のようになったのはいつなのかしら）

花紫学園の歴史は古く、後一、二年で百周年を迎える。そのうち九十周年までを女子校で過ごしてきたのだ。女子の制服は制服誕生から一度も変化がない。それはいつの生徒もこの制服が好きだったことと卒業生たちの力が強く、制服を新しくしようという学校側の案を握りつぶしたからだ。そんな極度の愛校心を持つ数千、数万の乙女たちも共学に変えるという学校側の案だけは覆せなかったのだ。

それでも、大規模なデモ行進が起こった。老いも若きも、制服に身を纏い、白いプラカードを手に持ち、共学反対を訴え街を練り歩いたのだ。その仮装行列……いや、デモ行進には警官が止めに入ったほどだ。香月も祖母と母に連れられ、行進に参加した記憶がうっすらある。最高年齢百一歳の女子高生を筆頭に様々な年齢、体格の女子高生。特に隣で歩いていたすね毛の生えた制服姿のおじさんは、教え子だった奥さんの変わりに制服を着て参加していた。あれから香月は極度の恐がりになったとか、ならないとか。まあ、あまりいい思いではなかった。ちなみに女子校の名残のせいか、この学園の男女比は極端に女子が多かった。何せ一学年二クラスしかない理系にしか男子の受験枠がないからだ。

二人に訪れた微妙な沈黙に、香月は目をさまよわす。槇のバッグに目玉を見つけたからか、さっきから誰かに見られているようで落

ち着かない。なぜだか知らないが、怪我をした目がちくちく痛むのを感じた。そのせいか変な汗がじんわりでていた。ちらちらと槇のバッグを見るが、あの目玉は今日は持っていないのか見あたらなかった。そのかわり、ずがずがと肩で風切る、風切委員長を発見した。黒い尻尾が生えていても、時には人の役に立つのだと、心の中だけで感謝した。あの委員長にそんなことといった日にはまたこき使われるのが目に見えているからだ。

「あ、委員長っ！……すみません、先輩。委員長が来たみたいなので、私、仕事に戻りますね。さぼっていると後が恐いので。それじゃ、失礼します」

かなり、棒読みであきらかにわざとらしい台詞に、失礼だったかなと思いましたが、香月は司書室に駆け込んだ。入ってはじめて気がついたが、図書室はクーラーのきいた快適な部屋だというのに、香月は汗でびっしょりだった。まるで何か恐いものに出会ったときのようにだ。

「へっくちょん」

クーラーの冷気に体温を奪われ、香月は変なくしゃみをした。

（女子校と共学で話が違う……ね。もしかしたら彼女の思いつきはあながち間違っていないのかも。調べてみる価値はありそうね）

口元だけで笑みながら、槇は書庫の置くに向かった。途中、さりげなく本の背をなでる。そしてそれが当然であるように、一冊の本を抜き取ると、貸し出しカウンターを通ることなく、自分のバッグにしまった。槇は肩に掛かる髪を払うと図書室を後ににした。

「へっくちょん」

「なんだ入ってくるなり、本にかかったらどうする気だ」

今、もし、この場で大きな地震が起き、たくさんの人が傷ついて

もきつとこの人は本が第一なんだろう。そう香月はじと目で委員長を見ながら確信した。香月はもう一度、盛大にくしゃみをした。

「へっくちょん」

「夏風邪？」

心配そうとはいえないが、一応そう聞くだけの人としての優しさがあるのは、間違っても黒い尻尾を隠し持つ委員長ではなく、この部屋の主、中川である。「軟弱な」と聞こえよがしに言う委員長を香月は完全に無視した。

「たぶん汗をかいたから、そのせいだと思います」

「汗だと。体育二の君がか？ありえない。体育以外で運動をするなんて」

「ひっどーい。なんで二なんですか。……そりゃ、運動は苦手で、できればズルしてでもやみたいですけど。でもっ、まだ通知表は出てないんですよ。三かも知れないじゃないですかっ。委員長だって、二かもしれませんよ」

ぷーっと頬を膨らませて怒る香月のそこを指でつついて委員長は破裂させる。

「私は毎回、三だからな。今回も間違いなく三だろう」

五十歩百歩の低次元な戦いは、ばかにされたばかりにされた地団駄を踏んでいた香月が思い出した腕の重みで方向を変えることとなった。バンっ。威勢良く机が叩かれ、香月は三文コメディのごとく痛みに手を振った。それがなければ、馬鹿にされる回数が三分の二に減ったであろう。

「そんなことより、委員長！　今まで仕事をしないでどこでさばってたんですか？そ・れ・か・ら！！変な本を買わないでくださいっ！」

「さばった、とは心外な。君じゃあるまいし。部活だよ、ぶ・か・つ。こう見えても、帰宅部の君と違って、幽霊部長なんでね」

幽霊部長……何か一字違う気が。というよりも部長が幽霊でいいのか。そもそも、帰宅部と幽霊部長ではドングリの背比べなのでは。

「それに、私が出す購入依頼に変な本などないぞっ！」

胸に手を当て、左手は聖書代わりの広辞苑に置き、高らかに委員長は宣言する。

「そんなことを言っても駄目ですよ。ネタは上がっているんです。

『死体はアイス』ってこっんなぶ厚い本を買ったじゃないですか」

「『死体を愛す』か。確か異常殺人者についての本だったな。……

だが、あれは私じゃないぞ。依頼者は匿名希望連合軍だったはず」

確認を求め、委員長は中川を見る。少しの間、中川が動かすパソコンの音のみが部屋に響いた。

「ああ、風切さんの言うとおりだね。希望者の欄には何も書いてないよ」

「匿名でも購入依頼って有効なんですか」

あくまで無効だと知っている間いかけだった。

「基本的には、高尾さんが思っているとおり、無効だよ」

やっぱり。ガッツポーズを作ろうと握った手は、見えない眼鏡レザーにより阻止された。

「しかし、何事にも例外はある。……希望者が複数いれば買わざるを得ない。我が図書室では匿名を含め十人以上の希望があれば、倫理に反するもの以外は必ず購入する方針をとっている」

「と、いうと……あれも例外」

「ああ。おもしろいことに昨年から四冊ほどその手の購入がある。

どれも無記名で十人以上の希望だ。それもジャンルが全て同じだ。

故に彼女ら、もしくは彼らを匿名希望連合軍と名付けたのだ」

選挙演説に負けない力説を見せる委員長の迫力は図書室にも及び、カウンター近くにいた平図書委員と利用者は反射的に身をすくめた。噂で聞いた話だが、図書委員会で毎年行っている多読者賞の発表のとき、七時間の耐久演説を委員長が行ったらしい。居眠りをした人には、貸出しカードがダーツの様に椅子に突き刺さるというおまけ付きだったとか。校長は耐えられずに失神し、教師も止めようにもカードの洗礼にあい無理だったとか。だが、二年生以上が話すのを

恐れているので、真相は藪の中だった。一つ確かなのは、中川の指摘により、演説が半分を残して途中で終わったということである。

「でも、なんで誰も読まなそうな本ばかり」

「そんなことないよ。あの手の本は、どの学年にも必ず少数だけど読者がいるよ」

香月の言葉を途中で奪った中川の司書らしい意見に、香月は驚いた。入学はじめの図書室の利用方法というオリエンテーション以外に、中川が司書らしい発言をすることがなかったからである。いや、委員長の個性が強すぎて存在が薄らいでたというのが、本当のところだろう。

「それじゃ、その人たちが」

「いや、それはありえない。何しろ彼女らはそのほとんどが私のよく知る人間。つまり、匿名にする意味がないのだ」

「みんな、文芸部の人だもんね」

折角、ミステリアスに決めたのに、じと目でそう語る委員長を、笑顔で受け流す中川はやはり普通の司書ではない。そう香月は思った。

（文芸部か。委員長のいる部活だもんね。きっと変な人ばかりなんだろうな）

偏見に満ちた想像を香月は巡らす。できたら一生付き合いたくない部活である。そう結論がついたのはいうまでもない。

「だから、希望者は隠れ読者ってことだね」

「でも、そんな手の込んだことするんですか？」

ちっちっち。自分で効果音をつけ、委員長は人差し指をふる。

「香月君。それを愚問というんだぞ。現にこうして四冊の本が購入されているんだ。誰がそうしているに他ならないだろ」

「あっ、そか。でも、なんでそんな手の込んだことをするんですか？ そんなに欲しいなら、お金貯めて自分で買えばいいのに」

「それができないから購入させるのだろう」

「ほへ？　どういうことですか」

頭を抱えて悩み込む香月に、本のことになると異様に頭の回転が良くなる委員長はがくりと肩を落とした。ことんとカップを置く音とともに中川が口を開く。

「部屋に置いておくことができないってことかな」

「その通りです。だてに長く生きていませんね」

「えーと、つまり……分かりません」

十秒も考えずに、香月はギブアップをする。

「頭を使え。脳も使わないと劣るぞ……ま、私じゃないからいいがな。例えばだ、君に男がいて、そいつが部屋に来るとするだろう」
「ふむふむ」

「そのとき、君の部屋にマッチョな兄貴本がずらっと段ボール一箱ぐらいあったとしたら、どうする？」

「そんなもの持ってないですっ！」

間髪いれずに香月は否定する。

「馬鹿者。仮定の話だと言ったはずだ」

「あ、そうでした。えーと、隠すか捨てます。だって、そんなのが好きだと思われたら恥ずかしいじゃないですか」

「そう、つまり今回の首謀者もそれだろうな」

「へ？　それってマッチョな兄貴が好きなんですか？」

香月の間の抜けた返答に、がくりと膝を折ると委員長は見事なOTLを披露した。

「つまり、異常殺人が好きだと思われたら、嫌だというわけだ。もしかしたら、他人からはそんな本を読むとは全く思われていないような人ってことかな」

「その通りです」

「そこまで分かるなら誰がこんなことしているのかも分かるんじゃないですか？」

「目星はついているが、こちらに害はないからな」
「目星って」

推理小説の犯人が分かるときの心境とはこんなものだろう。恐くてとても読めないのだが、香月はそう今、感じているわくわくの形容を決めた。

「たぶん新聞部だろう」

「新聞部？ ……あ、そういえば槇先輩も」

そこまでいって香月は口を閉じた。

（でも、あれは謝りに来たから……関係ないか）

「槇？ 新聞部の女王陛下がどうかしたか」

本のこと以外で委員長が興味を示すのは大変珍しかった。だが、どう話せばいいのか、香月は困っていた。そんなとき助け船を出すのは決まって中川だった。そう、こんな風に。

「風切さん、お呼びだよ」

中川が指で示すのは、図書室に通じるドアだった。そこにはどう声を掛けたらいいのか、もう十分も前から悩んでましたと、顔に書いたような困り顔の男子生徒が立っていた。きっと部活の人だろう。委員長は恨めしそうにそれを見ると、行儀悪くちっと舌打ちをした。一体何冊の本が入っているのか、……たぶん教科書は入っていないだろう……分からないような重たそうなバッグを持つと、委員長は中川に向かい敬礼をする。

「すみませんが、今日はこっちを休みます。あとは香月君がやりますので」

勝手なことを言って出ていく委員長の後を、おそろおそろ待っていた生徒が追いかけていく。二人の姿が見えなくなったところで、香月は思い出してしまった。

「ああっ！ 夏休みの当番の抗議をするのを忘れたあっっっ！」

ああ、無情。そういうときに限って、仕事の量はいつもより多いのである。中川はにっこり笑って無言の圧力をかけ、香月に装備待ちの本を渡すのであった。

時間は変わりなく流れ、閉館時間の五時を告げた。

待ってましたとばかりに、香月は図書室を占める準備に取りかかる。ばらばらと帰宅をはじめる自主学習をしていた生徒をさっさと出ていけとばかりに追い出し、今日の利用者の集計を出している二年の見知らぬ図書委員の仕事を奪い取る。下手に仕事を待つより自分がやった方が早い、猛スピードで鉛筆を走らせ香月の姿に、シヨートの顔も知らない図書委員は第二の委員長を見た。びくびくと挨拶をして帰っていく上級生に、香月は生半可な返事で答えると、超特急で動かしていた手を止めた。知らずの内に、委員長同様、貸し出し用個人カードの束を見ただけで、だいたいの数が分かるようになっていた。

（今日の貸し出し数、三年一九人、二年四三人、一年二六人、教職員八人。しめて九六人。一年が少ないのが少し気になるので、対処法を考えないと）

そんなことをぶつぶつと一人つぶやき、カバーを掛けた新着図書をお披露目用のケースに入れる。新着図書は一週間お披露目ケースに入れられてから、利用されるのである。

（早めに読みたい人は、予約を入れてくださいね、と）

全ての作業を終えると、香月は司書室のドアを開け、簡単に作業終了を告げると慌ただしく図書室を後にした。今日中に抗議をしないと、時効成立で夏休み返上になってしまうからだ。頑張っていると、片手をあげ香月を見送る中川の目がそう語った。図書室を突き抜けていく、香月の姿は言葉通り、あつという間に柱の影に消えた。その柱に掛かっている絵を中川は遠目に見た。新聞部の調査のせいか、額が少し曲がっていた。間違っても香月が、慌てついでにぶつかったせいではなかった。

（イタイ……どうして私はいつもこういうのよ）

柱にぶつかった左腕をさすりながら、階段を一階から三階へと駆け上る。こんな時、普段はみんなに馬鹿にされるが、バッグをナツプサックにして良かったとつくづく思う。一気に駆け上るも、よう

やく三階にたどり着いたときには、息も絶え絶え、はあはあと肩で息をして、のそりのそりと重い足を運ぶ。委員長が入っている文芸部の部室は三階西の渡り廊下にある。隣室はおそらくも生徒会室だ。部屋を間違えていないか入念に確かめ、こわごわと扉を叩き、顔をのぞかせる。

「失礼しまーす。図書委員の高尾ですが、委員長はいますか」

五畳ぐらいの細長い部屋に、夕日が映る。棚等が置かれているので、そこは実際にはもっと狭く見えた。まぶしくて香月は目を細める。もそもそと動く黒い影があり、まだ人がいるのがわかった。しばしの沈黙と、小声で、委員長って風切のことだね、と当たり前確認をしているのが耳に入った。中に入ってもいいのか分からず、開けたドアの隙間から顔だけのぞかせるといった、中途半端な姿勢で香月は立ちつくした。

「風切ならもう帰ったよ」

そう答えたのは、部屋の真ん中に置かれたこの部屋には大きすぎる机の一角に座った女子生徒だった。彼女は香月を見ようともしせずに、ただ目の前に置かれた分厚い本にのめり込んでいる。手にはマーカーを持っているので、きっと何かの参考書なのだろう。あまり邪魔をするのもよくないと思い、というよりもできるだけ関わりたくないの、香月はあっさりとドアを閉めた。

（委員長を呼び捨てにできる人がいるんだ。やっぱり文芸部は噂通り奇人の巣窟なんだ）

偏見的な噂を鵜呑みにして、香月は文芸部室に背を向けた。これで夏休み返上は確実になった。肩を落とし香月は表校舎の階段に向かう。

「こういうときに限って委員長いないんだから。用がないときにはいつもいるのに」

必要な時にこそみつからない。なんだかどこかの本にそんな文章あったな、と思いながら歩いていると、

（あれ？ 槇先輩っともう一人）

「げ！ サメ」

学園一の美男美女が三年の教室前の廊下にいた。というか、槇は三年だからいて当たり前だ。香月は咄嗟に壁に隠れ、「あら、やだ」と野次馬になる。二人は校舎の中央にいたのでここからは教室四つ分くらいの距離だった。仲良さそうに何か話している。そういえばここ数日、サメに一度も会っていなかったと、図書室で気付いたことを思い出した。

「何やってんのよ。もう」

いつもはプチストーリーカーみたく、どこからともなく湧いて出てくるのに……。なぜだか胸がちくりと痛む。

「君こそ何やってるの？」

自分の一人言に返ってきた返事に、香月は飛び上がって驚いた。後ろに立っていたのは、委員長を呼びに来たあの男子生徒だった。

「あ、ゴメン。脅かしちゃった？ 何か見てみたいだけど」

身長はサメよりかなり低く、さらに平均よりもちよつと低い、平凡な顔つきの若干さわやかな彼は、香月がしていたように廊下をのぞいた。

「槇さんと付月くんだね。確かに気になる二人組だ」

「わ、わ私は気になりませんよ。どちらかというと槇先輩があのプロチストーリーカーに迷惑しているんじゃないかなって、確認していただけですから」

「あ、そうなんだ」

全身全霊をかけた拒否に、彼は少し、ほんの少しだけ引いた。

「って、そんなことより、ワたしニ何カよウデスっか！」

話を変えたくて、そう聞いたのだが、焦っていたあまり発音がおかしくなってしまった。少しずつ夏休みへの期待に光がさしはじめる。

「さっき風切部長を探していたでしょ。もう三〇分ぐらい前に図書室に戻るってでてったんだけど、会わなかった？」

「先輩が迎えに来てから、ずうっと図書室にいましたが、委員長は

来てないですよ」

「じゃ、さぼったんだ」

一瞬でも期待した自分が恨めしい。肩を落として落ち込む香月に、先輩は帰るのなら途中まで一緒に行こうと、誘ってくれた。途中って言うても、二・三年の昇降口は二階なので、階段を一階分下りるまでである。昇り損だ。またこれから一階まで下るのかと、香月は小さく息をついた。

先輩に続いて歩きだす。

何気なく見た廊下の向こうで、サメがこっちを向いていた。やはり側には槇がいる。

（関係ない。関係ないもん。サメが何しようとか気にならないから）
ぷいと前を向くと、ずがずかと委員長のように胸を張って、香月階段を下りていった。

一方、サメたちは……

「本当にいいの。手伝ってもらって」

「ああ……。興味がある」

サメは槇に話を振られ、慌てて視線を戻した。いつものぶっきらぼうな調子の声に、槇は気がつかなかったが、サメはかなり動揺していた。香月が見知らぬ男と仲良く歩いていた。もう香月には自分の存在なんてどうでもいいのだろう。いや、もしかしたら邪魔じゃないのか。だから、必要以上に邪険にされるのだ。

「そう。私も貴方に興味があるわ」

（あの人に似ている貴方に）

誰をも、特に新聞部員を魅惑し、自分の支配下においた魅力的な笑みを浮かべ、彼女はあからさまにサメを誘惑する。言葉通り、槇はサメに興味があった。目玉が初めて見せたあの恍惚する光景。そこに映し出された血塗れた人間に、サメは酷似していた。できることなら、もう一度あの光景を自ら再現したいと危険な誘惑にかられ

る。

「そんなこといったら、彼女に怒られるわね」

槇はサメに背を向け、香月がいたのとは逆の方向、非常階段の方へ歩き出した。サメも重い足を前に出した。

「香月は怒らない」

今は、その話には触れなくなかったのに、サメはごまかさずにそういつてしまい、わずかに眉間のしわを深めた。

「そうなの」

「ああ」

もう彼女には自分には必要ない。先ほど楽しげに男とともに去った様子が、脳裏をよぎった。見えなくなった左目はもう用無しなんだ。サメは悲観のるつぼにはまっていく自分に嫌気がさした。

（俺のせいで、香月があんまり泣くから、いらないうから「見る」こと以外で必要とされたかったのに）

事故で、失った片目を包帯で巻いた小さな女の子は、いつも泣いていた。包帯が外れても、青くなった目を見ては、悲しげだった。自分を見て泣く香月が嫌だった。そのうち、「見えないから必要ない」っていわれて、見捨てられるのが嫌で、だって左目は香月の一部だから。香月に必要とされたかった。そう思い続けていたから、気づいたら幻影になっていた。

槇が止まったので、サメもそれに倣う。思考も止め、ただ窓に映る空をぼんやり眺めた。これ以上考えていたら、きつと狂うだろう。そんな予感を、与えられた使命に没頭することで彼は正気を保とうとした。

（所詮、俺はただの幻影）

いつか消えるのは、わかっていたんだ。そう思ったところで、本当に彼はそれらのことをきれいにデリートした。

「何かあるのか」

窓を開け放ち、身を乗り出して槇は下を見ている。隣の窓から、下を見るがあるのはいつもと変わらぬ中庭の風景だった。長い髪が

風で攫われるのを、片手で押さえ、槇は楽しそうに下に見入っている。そのまま落ちてしまうのではないかと、心配しかけたところで、彼女は廊下にまた足をついた。

「前に話した飛び降り事件があるでしょ」

「ああ、この学園の生徒も犠牲になった」

その事件は、香月が小学校最後の年におきた。サメはすでに幻影として、香月のそばにいたころのことだ。おぼろげに祖母や母の会話を聞いた記憶がある。もし香月が、それに関する新聞を読んでいたら、いやチラッとでも文面を見ていたら、サメは正確にその記憶をたどれただろう。たとえば本体が忘れていても目は見たものは忘れないのだ。

「ここから落ちたのよ」

逆光を浴びた槇の表情は見えなかったが、妖しく歪められた口元は、マドンナと称されるものとはほど遠かった。

「なぜそんなことがわかったんだ？」

当時の生徒に聞いたのか？サメの表情にそう出ていたのか、槇はことさら楽しそうに声に出して笑った。何が楽しいのかサメにはまったく理解できなかった。

「見えるの……なんてね」

じゃ、またね。優雅に会釈すると、槇はサメの横を過ぎ去った。

長い髪が、動きに合わせてゆれ彼女の耳が見え隠れする。その瞬間に、サメは見た。彼女の右耳につけられたあの目玉を。それと目が合ったとき、彼はそのことに気がついた。

「七不思議にかかると、不幸になるぞ」

くるりと、槇は振り返り、馬鹿にするような目つきをした。

「『恐怖の大王』に喰われるんでしょ。ふふ……そんなのただの迷信よ」

そういつて彼女は長い廊下を、暗闇に向かって歩いていった。

「さて、それを知った君はどう動くのかな」

サメの隣で現れた声は、ゆらゆらと動く黒い影となり、それはふ

ふんと笑った。その声は、香月が聞いたあの幻聴だった。

ばんっ

力一杯開かれたドアの盛大な音よりも、さらに大きな音を立てているかのように、どがどが入ってきたのは香月の探し人だった。委員長は、文芸部の彼が言ったとおり図書室に姿を現した。昼のうららかな日を浴びた図書室は、いつもとその姿を変えていないのに、どこことなく違和感を感じた。ちっちちちち、秒針が奏でる音楽が不規則にこだまする。委員長はいつもと変わらぬショートヘアに、校則ぎりぎりの長いスカート姿で、カウンター目指し、いつものように大股で前進する。だが、その影は普段とは違い、人の大きさをうらいのデフォルメされた毛虫としかいえなかった。一言で言えばそう、ケムンパスの様であった。

「リアンっ。ライブ・ラ・リアーーンっ」

カウンターに座り、本を読んでいるのは司書の中川ではなく、花紫学園の制服を着た少女だった。楨と競えるほど長く黒い髪の下の方を後ろで結んでいる。委員長の絶叫に気がついた少女は、読んでいた本をカウンターに置いて立ち上がった。そのわずかな間に、委員長はすでにそこにたどり着いていた。

「何か用ですか？　ワーム」

「筆記の準備だ！　主様に捧げる物語のはじまりだっ」

不思議の住まう学園で

香月がそれを見たのは四時間目のことだ。退屈きわまりない英語の時間に、優れない体調が拍車を掛けるのか、ものすごく眠かった。半分あくびをしながら、肘についてノートをとるさまをして、手にしたシャープペンで遊んでいた。もう寝てしまおうか、そう思ったとき、それは突然現れた。

黄色いパジャマを着た小さな女の子。その子は裸足のまま、机を気にもせず、何かを追いかけて走っていく。

半透明の映像に驚きよりも、香月は見逃さないといった風に、目でそれを追っていた。

小学校に上がったばかりぐらいの女の子は、香月に向かい走ってきて、香月を通り抜けた。

（嘘！）

今朝見た夢の女の子。それは、香月自身だった。

黄色いパジャマの女の子は、鏡の前に立っていた。

鏡に映るのは左右逆の自分。

右から左に、上から下へと斜めに巻かれた包帯が痛々しい。

女の子は包帯の下が気になった。隠れた左目が見たかった。

くるくる包帯を取ると、ころりと目玉が落ちた。

ぽっかりと開いた左の穴に、女の子はきよろきよろと左目を探す。

目玉はころころ転がっていた。

女の子は走る。目玉を追って走る。

だけど、後少しなのに追いつかない。

すると目玉は、誰かの足下で止まった。その誰かはそれを拾うと、大事そうに両手で包んだ。

そこにいたのは槇だった。

手に目玉を持った槇は、横に立つサメと共に小さな香月から遠ざ

かっっていく。

「気持ち悪い」

真っ青な顔をして香月は歩いていた。さっき見た白昼夢のせいで、体調は最悪になった。そうでなくとも夢見が悪く、朝から気分が優れなかったのだ。保健室に行くと、お弁当仲間に言ってきたから五時間目はいなくても大丈夫だろう。みんな口々に、ついていこうかと言ってくれたが、大丈夫だと押し切った。本当は保健室ではなく司書室に行くつもりだからだ。なんだかそうしないとこの気持ち悪さは治らないと、体が勝手に動いた。保健室も司書室も共に一階の裏校舎にある。中央の渡り廊下までは同じ道だから、きっと保健室に行ったと思うだろう。口元を押さえながら、香月はそんなどうでもいいことを考えていた。

（そういえば、サメと槇先輩がくっついたんだっけ）

異様な寒気に小刻みに震えながら、どうでもいいついでに、さらにどうでもいいことを思い出す。朝から教室はその話題で持ちきりだった。サメが新聞部に入り、槇と四六時中行動をともにしているらしい。クラス一の情報通の文弥が朝から何遍も同じ話をしていたので、もう自分が見てきた様に語れるだろう。

（昨日も放課後、二人でいたし）

重い足を引きずり、無理矢理前に出す。渡り廊下も後半分。あとは左に曲がれば、目的の司書室だった。

（っていうか、私の左目のくせに、何やってんのよ。目のくせに、何も見せないのに。アイツばかり）

強気の思いも、体のだるさの前には長続きがしない。思いと肉体が全く正反対にあるようで、気持ちばかり強気になるのに、体は一向に進んでいる気配がなかった。

（それにしても、どうしてつかないのかな）

教室を出てからもうだいぶ経った気がする。実際はそんなに経っ

ていないのだけど、香月には一時間にも二時間にも感じられた。体調が良ければ、教室から司書室まで政治家のように牛歩になってもものの5分もあればついてしまうのだ。もう曲がり角が視界に入っているのに、今日に限ってなかなかつかかった。

「君！ 大丈夫？」

香月の視界に、ブレザーが目に入る。誰かが心配をして駆け寄ってきた。

（はやく行かないと）

「顔色が真っ青だ。ほら、つかまりなよ」

気ばかり焦る香月に、見知らぬ誰かは手を掛けた。いたわるように軽く腕を捕まれ、香月を引きずるように促す。

（はやくはやく）

「保健室はすぐそこだから頑張って」

角を無理矢理右に曲がらせられる。香月は必至に司書室を目で追ったが、体がついていかない。ぐったりとした体はもう抵抗する気力さえなく、誰かの力で動かされていた。

（違う、そっちじゃない）

「ほら、ついた。…先生え、急患です」

悲痛な心の叫びと、急患を告げる声が重なった。明るい薬品の臭いが漂う部屋に連行されながら見た薄暗い廊下に、黒い靄が集まり消え去った。背中にぞくりと冷たい汗が流れた。

（恐怖の大王がやってきた）

そこで、香月の意識はぷつりと切れた。

黒い靄は裏校舎のそのまた裏に建てられた、部活棟に集まっていた。

部活棟には運動部・文化部に関係なく全ての部室があった。だが、文化部のほとんどは、教室で活動するためほとんど倉庫として使われているだけであった。そのため、部活棟の二階は開かずの倉庫群

と呼ばれていた。その中でただ一つだけ、活動に使われている部屋があった。

新聞部

すす汚れた四角いプレートには飾り気なくただそう書かれていた。昔は、ここでガリ版印刷を行っていたのだが、今は部会を開くのに使われる程度となっていた。そこに槇は一人いた。壁に沿わせたテーブルに向かい、何かに夢中になっていた。大きめの鏡を置き、それをのぞき込んでいる。ズレたコンタクトでも直している、そんな様子であった。

ことん。テーブルから何かが転げ落ちた。インクで汚れた床をそれは転がった。目玉だった。だが、よく見ると槇の持っていたあの目玉ではなかった。わずかにだが糸を引くそれは誰かの目玉であった。

ころころころ

槇は笑っていた。笑いながら顔に開いた右目の穴に、あの目玉を入れていた。

気づけば黒い靄は部屋中に集まり、あの目玉を伝って、槇の中に入っていく。

コンタクトを入れるのと同じように、目玉を入れると槇は二、三度瞬きをしてから、鏡に向かい微笑んだ。

「目は目へ」

これでもっとあれが見られるわ。

書類棚の中から、図書室から無断拝借した本を取り出すと、槇は軽やかに部室を後にした。黒い靄をたなびかせながら。

そのたなびく黒い靄を屋上から眺める影がいた。

影法師。その名の通り彼は誰かの影であった。屋上の手すりに足を組んで座り、ふふんとハミングをしながら手にしたラッパを弄んでいる。

「おい。聞いているのか」

背後から不機嫌そうな声がする。彼は手すりに立ち上がり、背後にいる彼を見た。薄っぺらい二次元の影はゆらゆらと定まらずに常に揺れている。そのためか、所々が透けていた。

「困ったことだ。恐怖の大王がまたやってきた。さて君は一体どうするのか」

以前聞いたような台詞を言う影法師にサメは苛立ち、一歩だけ彼に詰め寄った。

「だから、それを俺が聞いているんだ。お前が言うとおりに、あれを見つけた。それを取り戻せばいいのか、それとも」

「君はなぜここににいるのか知っているかい」

話を途中で奪いさり、影法師は意味不明なことをつぶやいた。サメは不機嫌を隠さずに、でも素直に首を横に振ることで答えた。

「私も知らないよ。なぜここににいるのか。あちらにすることも確かにあるが。だが、ここから離れられない」

「自縛霊か何か」

思ったままをサメは言葉にした。実際、サメも彼が何者なのか知らなかった。ただ自分に名をくれ、今ある肉体を与えてくれたのは確かに彼であった。そして、その恩のために彼が今縛られているのも事実である。

「私がかい？ 私は名乗ったはずだよ、影法師と。その名の通り、私は誰かの影なのさ。君が付月サメであるようにね」

ふふん、と彼は笑う。馬鹿にしているように感じる笑いが、彼の笑い方だった。

「名に意味があるのか。それよりも」

さっきの答えを、と口にしようにとして、また挫折する。

「君は至極当然のことを聞く。名に意味があって当たり前ではないか。名はそのものの本質を現すのさ。だから、君は付月サメなのだろう」

こめかみに手を当て、サメは唸った。授業で習う勉強よりも、サ

メは影法師との会話が苦手だった。影法師が何を言っているのか、分かつとうとするがいつも失敗に終わる。だから、要点だけ聞き出そうとするのだが、常に彼のペースで話は進むのであった。

「あんたが勝手につけたんだろ」

「そうでもない。私が付けたのではない。君の中にあつたものを讀み上げたただけだ。君は左目で、高尾香月のものではないか」

それで付月サメか。あまりにも単純すぎて気がつかなかつた自分が馬鹿馬鹿しかった。

「それにしても、あるべきものを失つた彼女は大丈夫なのだろうか」サメは分からない顔をした。やれやれと影法師は仕草で語る。

「極端な話だが、もし空気がなくなつたらどうなるか考えてみるといいさ」

香月が意識を飛ばしていたのはほんの二、三秒のことであつた。

気がつけば目の前に保健室の先生がいる。そして、さらに気がつけば、容態はなぜだか嘘のようにけろっと治つていた。だから、いつも優しい保健医がむつとしたのも仕方がなかつた。実際、香月と彼女を連れてきた生徒が図つて授業をさぼろうとしたのではないかと疑われた。一生懸命香月の容態を語る生徒に、保健医は首を傾けながら、香月の脈を計り、また悪くなつたら来なさいと追い出された。すぐすぐ部屋を出た二人はそこでお互いをちゃんと見た。

「あ！」

「なんだ、昨日の」

口を開けて驚いた彼は、文芸部の彼だった。

「すみません。えっと、四条先輩にもご迷惑かけて」

保健医とのやりとりで出た名を思い出して謝ると、四条は照れたように笑い、片手を顔の前で振つた。

「気にしないで。あんなに真っ青な顔しているの見たら、誰でも助けるよ」

どんなに苦しんでいても、絶対に助けられない人間を一人、香月は知っていたが笑顔でごまかした。

「本当にもう何ともないの」

「はい、何ともないです。嘘みたいに元気なんです。なんでだろ？」
すでに授業ははじまっていて、廊下は静かだった。

「それじゃ、授業行かないとね。今は大丈夫そうだけど、一人で戻れる？」

「はい、大丈夫です」

階段の前で、二人が背を向けて別れようとしたとき、不意に呼び止められた。

「お二人さん。もし良かったら、寄っていく？」

開かれたのは紛れもなく、香月が向かおうとしていた司書室のドアであった。

気がつけば、いのように丸め込まれて四条と香月は作業用の机に向かい合いで座っていた。いつもは四条の所に委員長が座っているのだが、知り合ったばかりの男子生徒にお見合いのように香月はガチガチに緊張していた。

「これじゃ、まるでお見合いみたいだね」

当たり前のように中川は、二人にコーヒーを出してくれた。普段は委員長の印象が強すぎて存在さえ忘れがちだが、その委員長と一年以上以上接してきた人なのだ、やはり普通ではなかった。改めて自覚した香月は、腹を据え、いつものようにコーヒーをすすった。ミルクをたっぷり入れたので、コーヒーというよりカフェオレになっていた。

「いいんですか？ さぼって……しかも、生徒まで巻き込んでいますよ」

「ひどいな、高尾さんは。さぼっているのを僕のせいにして。ちゃんと疑問系で聞いたじゃないか」

そっか、と香月は相づちを打つ。和む二人に、四条はどうしたらしいのか分からず、ただじっと緊張し続けていた。

「冷めるから飲んでよ。えっと……名前教えてくれるかな？」

「四条幸隆、三年六組です」

律儀に会釈する四条に、中川は何かを思い出すように首をひねった。

「四条君って、もしかして元新聞部で、今文芸部のあの四条君かな」
「はい。その四条です」

うつむいて恥ずかしそうに、というかもう消えてしまいたいと伝えるか細い声だった。香月ははずず……と委員長の癖がうつっていることに気がつかずにコーヒーをすすると、無神経を丸出しにした。
「あのって何かあったんですか？　って、部長と同じ部活ってすごいですよね」

「そうだねえ。しかも彼、副部長らしいよ。あれ？　もしかしてもう引退した？　でも、副部長の四条君のおかげで心おきなく幽霊部長をしていられるって言っていたな」

そんなことないです。苦笑する四条を香月は尊敬のまなざしで見た。委員長がほめた生身の人間は数少ないのだ。

「で、あの、の理由は何ですか？」

「高尾さん。人間には誰でも聞かれたくないことがあるんだよ。そんなことを言っているとETの話四条君に教えちゃうからね」

「はっ！　駄目です、それは。もう何も聞きませんから」

必死に中川を止めようとする香月の姿に、四条も一緒になって「それって何ですか？」とからかった。はははは、と笑い声が占める部屋の隅で、中川は黒い靄が部屋から逃げ去っていくのを見ると、にやりと笑い直した。

「あ、そうだ。四条先輩は七不思議を全部言えますか？」

「七不思議？　もしかして新聞部の次の特集のこと」

「そうです。六つまでわかったんですけど、後一つが」

ちらりと中川を見ながら言う香月に、見られた司書は悪かったね

と苦笑した。その仕草に四条は事態を察した。

「部長……風切さんには聞かなかったの」

ぷー、と香月はふくれた。

「教えてもらえなかったんだよね」

「はあ、そうなんですか」

「そうなんですっ！」

先輩、教えてください。うるうると見上げる香月に、四条は力無く首を振った。

「ごめん。僕も全部は知らないんだ」

かくつと香月の首が折れた。

「でも、槇もきつと全部知らないと思うな」

ぽつりと漏れた言葉に、？を香月は次々に浮かび上がらせる。なぜですか。そう口にしようと思きかけると、終業のベルが鳴った。

「あ、終わったね」

中川は立ち上がると軽く伸びをする。

「さあ、教室に戻るといいよ。次は草むしりだから適当にさぼれるから。……二人とも、先生にあったら保健室にいたというんだよ。

今日はもう皆川先生は出張でそのまま帰る予定だから、誰にもばれないからね。安心して嘘をついていいよ」

作り笑いを顔に張り付けた二人にそう念を押すと、二人を廊下に追い立てた。階段のところで何か言葉を交わして別れようとする二人を見届けると、中川は司書室に入った。

「これで良かったかな」

誰もいないはずの部屋で彼は確かに、誰かに向かってそういった。窓際のデスクの近くで、影法師がふふんと笑った。

『恐怖の大王がやってきた』

声に出してその一文を読むのは、足を組んでふんぞり返る虫であった。目玉の大きい多足虫はこきこき、あるかどうか知らない首

を回した。

「未来形でなく完了形か。興味深い。実に、興味深い」

白い円卓に、ラムネが置かれる。いくつもの手が動き、それにストローを差す。ぶくぶくぶく、吸わずに息を吹き込む。

「ふわぁ。やはりソーダ水煙草はうまい」

紫煙をくゆらせつつ、虫はページをめくった。

「ワーム。恐怖の大王はもう」

「すでに動き出したわい。あー嫌だ。あいつが来ると胃が悪くなる」
三、四本の腕が腹あたりをさする。ワームはさらにページをめくる。

「ふん。影法師め。こそそとまた動き回っておるわ。だが、四条を使ったのはいい判断だ。リアン、あの事件に関する本を用意しておきな。私はでてくる」

ワームは壁に掛かっていた絵に向かって飛ぶと、その黒い穴に吸い込まれた。

「次は草むしりか……適当にさぼるか」

壁に掛かった時計を確認すると、委員長はずがずがと図書室を後にした。

誰もいなくなった校舎に彼女はいた。開け放たれた窓から入る熱風が、黒い髪をさらっていく。

ころころころ

静寂が伸びる廊下に、彼女の笑い声が響く。その腕には赤ん坊のように眠る犬の姿があった。恍惚に染まる瞳に、おさげの女子生徒が映る。その生徒はうつろな瞳で、窓の下を見つめている。軽やかな足取りで、窓にたどり着くと、お下げの少女は吸い込まれるように窓の下に落ちていく。そして、体をありえない方に折り曲げ、血の花を咲かせる。

ころころころ

鈴の音のように槇は笑う。誰もが憧れる少女は実に愉快そうにその死体を眺めていた。興奮のせいか頬が赤く染まり、白い肌によく映えた。腕の中で眠る犬を神聖な儀式のように恭しく宙に放った。おさげの少女の如く犬は大地に落ち、鮮やかに散った。

ころころころ

楽しげな笑い声のように、黒い靄が槇の体にまとわりついていた。

最初にそれを発見したのは中川だった。

ぐしゃぐしゃになった犬は、中庭の歩道の上で息絶えていた。

「落とされたのか」

ぼとりと死骸に降る言葉は冷静だった。残死体を見てもさして心を動かされない。そんな声だった。

死骸の傍らに立ち、そこから落ちたであろう窓を見た。開け放たれた窓の群から、迷うことなくそれを見つける。その窓の上の屋上からかつて転落死した少女がいた。数年前の出来事であったが、彼にはそれが数十年、数百年も前のように思えた。

「繰り返すつもりか」

犬と窓をもう一度見ると、中川は何事もなかったように司書室に戻っていく。一度、死骸を振り向く。犬から黒い靄が立ち上がる。

「はじめまして。恐怖の大王さん」

軽く頭を下げると、今度は間違いなく司書室に戻っていった。

誰にも告げることなく、彼は最初の発見者であることを放棄した。

今日の最後の授業は、夏休み前のグラウンド清掃だった。全校生徒で行うそれは、手っ取り早くいえば校庭の草むしりだった。花紫学園には整備されたグラウンドと、それよりもやや大きい芝生といった広すぎる敷地を抱えていた。用務員のみでは決して手が行き届

かない面積を、全校生徒と職員が総出となって草をむしるのだ。校舎内に残るのは電話番号のおばさんだけのほずである。

「大丈夫？ ……手伝ってもらって」

「ちょっぴり重いですけど、大丈夫です」

たまたまクラス分担が隣だった四条と香月は、手押し車とバケツを持ってゴミ捨て場となった窪地まで二人で歩いていった。ゴミといっても四条が押す手押し車に乗っているのは伸び放題だった草だし、香月がへこたれ気味で持っているバケツには大きめの石だった。

「毎年思うけど、こんなに無駄に広くてたいへん……うわっ」

手押し車の一つしかない車輪が、芝生に隠れてあった小さな穴にとられ、四条は危うくひっくり返すところだった。

「ふう、危ない危ない。またひっくり返すところだった」

「……うう、ごめんなさい」

先程興味半分で、手押し車を押し、中身をぶちまけてしまった香月はしゅんと背を丸め小さくなった。あくまでバケツが重いのは関係ない。

「あ、ごめん。君の事じゃないから。一輪車って平らなところだとあれだけど、こうでこぼこしていると押すの大変だから」

「さっき私がこけたところ平らでしたよね」

「そそうだった？ そんなことより、やっぱりバケツも乗せなよ。重いだろう」

どんどん墓穴を掘る四条は無理矢理話題をバケツに変えた。確かにさっきまで隣を歩いていた香月は、少しずつ遅れはじめていた。ゴミ捨て場まではあと一〇〇メートルぐらいはあった。

「いえ、これぐらい」

「貸せ」

無理に頑張ろうとする香月の手から、ふいに重さが消えた。見ればいつも不機嫌な顔をより一層不機嫌そうにしてサメが横に並んでいる。奪い取ろうとするバケツを意地になって死守しようとするが、あっけなく力負けした。むすっと頬を膨らませる香月と陰悪なサメ

に四条はおそろるおそろる声をかけた。

「君、付月だよね」

先輩らしく呼び捨てるも身長差が二〇センチメートル近くもあれば迫力などない。逆に上から不機嫌そうに見下ろすサメの方が上級生のようなのである。呼ばれたサメは口にこそしないが、お前誰？ と態度で示していた。

「返事ぐらいちゃんとしなさいよ」

全国のお母さんが必ず一度は言う台詞とともに、香月はサメの大きな背中をぱしっと手加減せずに叩いた。その瞬間、四方から鋭い視線が香月に集中する。近くにいた女子生徒が口々に小声で話し始める。ついついまたやってしまったと頭を抱える香月とは反対に、サメは口ではイタイと漏らすも心なしか構ってもらえてうれしそうである。

「こちらは元新聞部で、今文芸部のあの四条先輩」

中川の説明そのままをサメに告げる香月に、四条はやめてよその説明は、と照れた。

「高尾さんだって、学園一の奇人の気に入りで、片目が青いあの高尾さんって有名だよ。二、三年の間だよ」

「えっ！ 本当ですか。何の取り柄もない平々凡々なこの私が！」

「うーん、でも喜ぶようなことじゃないよ」

「でも、いいんです。一度は有名になってみたかったです」

「そうなの」

ちよっと引き気味に相づちを打つ四条に、何度も首を縦に振る香月。二人の仲が良さそうなその態度に、サメの周りの空気は一度温度を下げた。

「ゴミ。捨てないのか」

二人の間にわざと割って入り、四条の手押し車の草の山をさす。迫力負けした四条は、慌てて手押し車を動かす。折角の幸福な気分を害され、香月は腹立たしさを露わにしたまま、バケツをひったくると四条を追いかけた。

「どうせつきまとうなら槇先輩の所に行けば」

べーっだ。子供っぽく舌を出す。相変わらず不機嫌そうなサメの表情だったが、四条には飼い主に見捨てられた犬の様に見えた。

「いいの？」

「いいんですっ。甘やかすとつけあがりますから」

「さすが幼なじみだね」

「そうですか？ 先輩には幼なじみはいないんですか？」

「いるよ」

仲良く並んで歩く四条と香月。香月はちらっと頭を動かさずにサメを見ようとした。背後にいる彼がみえるわけがないが、視界の端に映った光景に足を止める。

（？ 気のせいかな）

黒い煙が校舎から上がった気がしたが、誰も騒いでいないので、見間違いだろーと思いい、香月はまた歩きだす。

「槇がそうなんだよ」

気になってもう一度見る。やっぱり黒い煙が上がっていた。

それが発見されたのは、草むしりが終わって、さっさと教室に戻った生徒だった。中庭に響く悲鳴はその事態を人々にいとも簡単に告げた。犬の死骸を囲み人だかりができ、教職員がわらわらと集まってくる。

「やったあ。あの犬、ノラだったね」

「えーっ。そうなの。結構カワイがってたのにい」

「んじゃ、やっぱり犯人はノラを嫌っていた人かな」

「犯人って」

「だって、香月。あれってやっぱり誰かに落とされたと思えないじゃん」

「そうそう」

「そういえば、物理の岸本が……」

四、五人の少女が固まって話しているのを中川は司書室のデスクから聞いていた。窓を一枚隔てているが、少女たちの甲高い声は、静寂に包まれた司書室によく響いた。少女たちは自分の話が聞かれているとは思っていないのだろう。楽しげに犯人探しをしている。最初はノラを、…その犬は学校に住み着いた野良犬で、呼び名は生徒により様々だがここではノラで話を進めよう…嫌いに思っている人物の名があがった。真っ先にあがる名は大の犬嫌いの物理教師名。ついで犬の排泄物に迷惑している用務員。果てはまるっきり関係ない、少女が個人的に逆恨みしている生徒の名。犯人に仕立て上げられるのは彼女たちの嫌いな教師や生徒であった。はじめこそは多少の理由があったが、仕舞いになると感情こそが動機となっていた。そんな中で意外というか、あまりにもありそうな名が口にのぼる。

「主かもよ」

「……そうだよ。図書室の主かも」

その名を聞いたとき、中川は吹き出しそうになり、慌てて口を押さえた。いくら何でもそれはない。確かにかつて委員長蔵書が入ったバッグをかじったノラが、翌日、首だけ外に出されそのバッグに入れられていた事がある。だが、それにしても委員長が何かするにはそれなりの理由があるのだ。それに、彼は誰がそれをしたのか知っていた。彼は見ていたのだから。

今まで黙っていた香月も中川と同意見だった。

「それはないよ。委員長、ああ見えても何かなければ変なことではないよ」

話はまだ続きそうであったが、中川の興味はそこで終わった。彼にとって見ればそれはたいした事件ではなかった。

ノラ事件から数日、学園は平和に時間をやり過ごしているようだった。夏休みまであと一週間足らずとなり、生徒の心はそちらに向

けられていた。そのせいか、ちらりちらりと教室ごとに休みの人間が増えてきていた。

「あつ、四条先輩。何かお探しですか」

ぱたぱたと書架から現れた香月は数冊の本を手をしている。どうやら棚に返却された本を戻しているところだったらしい。

「やあ。今日は外なの？」

「はい。今日の当番の人たちが全員欠席だったんで、代理なんですよ」

全体の休みの多さは、図書委員にも及んでいた。常に誰かが休んでもいいように三人体制で行っているのだが、今日に限って、全員が休みだった。仕方がないので、いつもは委員長と新刊装備を担当している香月が、カウンター業務を担当することとなった。

「そのエプロン……」

数冊のノートと参考書を持った四条の手が、白ウサちゃんのマークが入ったピンクのエプロンをさす。つられて一緒に香月も視線を落とす。

「ああ、これですか。カウンター業務は図書の返却をするので、制服が汚れないように委員会で購入したものです。九類の書架は別に着なくても平気なんですけど、二類とかだと」 奥の書架へと視線を向ける香月。今、二人がいるカウンター近くの書架は小説・エッセイ等利用頻度の高い九類。そして香月の視線の先にあるのはあまり活用されないそれ以外。特に二類の大型地図類はものすっごく古く、触れるだけで、ぱらぱらと紙が崩れていくほどだった。それだけでも恐ろしいのに、誰も利用しない証拠の積もった埃が、制服を汚すのだ。

「そうなんだ。でも夏休み間近だから、返却は少ないんじゃないの」
「そうでもないみたいですよ。すでに借りている人が、夏休みに返却に来るのが嫌で返却が殺到するって、中川さんが言っていましたから。だから今も棚に戻している所なんです」

数冊の本を掲げた香月は、大変なんです、とわざとらしくため息

をついた。

「この棚に戻すの」

「そうですよ。ラベルに棚の場所が書いてあるので、指定の棚に著者名であいうえお順に並べるんです」

自分の業務に興味を持ってもらえた香月は、張り切って実践した。「例えば、この番号はアメリカ文学を指すのでこの棚なんです。で、作者がシェルダンだから……あれ？」

左から右へ、本の背を見ていく香月の視線が一カ所で止まった。そこには分厚い本が行儀良く収まっているだけで、何も不自然なことはなかった。

「この本がどうかした」

「いえ、先輩と話す前はその本なかったのに」

「誰かが試しに読んでいたのを戻したんじゃない」

四条はおもむろに本を取り出すと、背表紙を開いた。オレンジのポケットにきちんと入った貸出しカードは真っ白でまだ誰の名も入ってなかった。

「ほら、やっぱり誰かがここで読んでいただけだよ」

きつとそうなんだろうな、誰かが席で読んでつまらないか何かして戻したんだろう。そう思っているけど、何か香月にはしっくりこなかった。そういえば、この本は昨日あっただろうか。そう考えはじめたとき、本を戻そうとした四条が手を滑らせ、それが床に落ちた。「ごめん」

とっさに拾いあげた本から、はらりと紙切れが落ちた。

「何か落ちましたよ」

新刊として図書室に出すとき、本の中に入っているチラシやほかきは全て取り除いているはずだった。見落としたのかな？ と香月は落ちた紙を拾い、確認するように見た。

「？ 何、これ」

ノートの切れ端には、きれいな文字でメモが書いてあった。

「一年四組の廊下前。秋。窓ガラスで怪我をする（女子高時か）」

「音楽室床。血痕あり。時間切れ」

二人で、一文ずつ読み上げ、顔を見合わせる。その後も似たように場所と不吉な内容が続いている。

「何でしようね、これ」

「うーん。プロットってわけでもなさそうだし」

「あ、でもここ。七不思議に関係あるみたいですよ」

平凡な指先が示したのは紙の中央やや左の文だった。「手に取る
と死ぬ本」と例のあれが書かれている。

「本当だ。その次の三年六組廊下、前から三枚目の窓、お下げの少女
についての関係があるみたいだよ」

「どういうことですかね」

他に何かないかなと、メモに見入る香月。四条は何か思いだした
かのように、顔に不安の色を走らせた。

「高尾さん、詮索するのはもうやめよう。これは中川さんにでも渡
した方がいい」

「いきなり、どうしたんですか」

「この七不思議は本当にあった事件に由来するんだよ」

「あ！ 飛び降り事件」

槇とはじめてあったときに語られた事件を香月は思いだした。花
紫市で起きた高校生の飛び降り事件。この学園でも死者が出た……

「そうですね。これは中川さんか、委員長に渡しておきます」

ふっとわき上がった恐怖に、手にしていた紙をくしゃくしゃに丸
めるときゅつとにぎった。まるで恐怖を握りつぶすかのように。

「うん。その方がいいよ。触らぬ神に……」

「はい。じゃ、さっそく渡してきます」

ぱたぱたと転びそうなほどに慌てて走る香月の背を心配そうに見
送った後、四条は大きくため息をついた。

「槇。何やってんだよ」

彼女が無断で借りた本をちらりと見る。流れる血の演出がやけに
本物らしく、四条は幼なじみの行動に一抹の不安を覚えた。

夏の日差しは高く、午後五時を過ぎてもまだ外は明るかった。

自転車置き場への道を香月は一人で歩いていった。今までなら、きよろきよろと不審な行動をとりながら歩いていた道も、最近はそのようなことをしなくてもものんびり歩けることに気がつき、うれしい反面、物足りなさを感じた。そんな感情も、慣れきった今になっては懐かしいものだった。

（サメがいないのにもだいぶ慣れたみたい）

物足りなさの不審な行動の原因は草むしりの時に会ったきり、また姿を見せなかった。七月に入ってから、サメが香月に接触する回数は極端に減っていた。はじめの頃は、いきなりのことに動揺したこともあったが、今は普通の友達くらいの距離を保っているように思えた。

（そういえば、サメに最初に会ったのっていつのことだった）

あまりにも長く一緒にいたので、香月はすぐに思いつかず、足を止めて考える。中学の時は間違いなくいた。五年生の時、在校生代表ででた卒業式では何を思ったのか、厳格な教頭のカツラを逆にして大騒動になったからいたのは間違いなし。三年のプールの授業ではやはり何を思ったのか、栓を抜き続け教師を困らせた。これも忘れられないできごとである。

（うーん。もっと前からいたよね）

見上げた空は夕焼けに変わっていた。遠くで鳥が飛んでいく。秋は夕暮れってホントだな。秋じゃないけど。と、思いつつ、日めくりカレンダーを一枚一枚張り合わせていく。どんどん戻っていく思い出は、いつしか事故の近くにまで遡っていく。その拍子に左目がズキンと痛くなる。アイスピックで貫かれたような痛み、とっさにうずくまり左目を押さえる。最近、頻繁に目が痛くなるのだ。

右目だけで見る風景は、両目で見るとより何かがほんの本当にほんの少しだけ変だった。その風景の中に、香月はその人を見つけた。

ふわふわと何かに取り憑かれたような足取りで校舎に向かっていく。痛みを忘れ立ち上がった香月は、彼女にまわりつく黒い靄をはつきりと見た。いつの間にか左目の痛みは消えていた。うっすらと残った靄を追って視線を動かすと、その先には体育や外部そとぶが使う器材が入った倉庫があった。

「おい」

「ギャア！」

ぽんと肩に置かれた手に、香月は思わず悲鳴をあげた。心臓がばくばくと飛び出さんばかりにはねまくっている。びくびく振り向くと、香月の声に驚いたサメが少しだけ目を大きくしていた。

「可愛くない悲鳴」

「悪かったわね。悲鳴が可愛くてどうすんのよ。助けが来ないじゃない」

口調は強気だったが、安心したせいか涙が一粒、二粒とこぼれた。恥ずかしくて、わざとそっぽを向くと、さっさと行きなよと指でさす。

「槇先輩ならあっち」

それだけ言うと、ズガズガと思い切り腕を振って大股で自転車に向かう。数歩行ったところで、腕をつかまれる。

「何よ」

きっと睨むと、サメは何も言わずに手に握らせる。

「ん？ ハンカチ？」

「今日、持ってくるの忘れただろ」

「あ、うん。……って、何であんたが知ってるのよ！」

中学の時ならまだしも、高校に入ってからサメは香月の元では一緒に暮らしていなかった。どこで暮らしているのかも気になっていたが、会えば喧嘩の毎日で未だに知らずじまいだった。

「香月は、そうやって怒ってる方がいい」

小さかったときと同じように頭をくしゃりとなで、サメは香月が指した方へ走っていく。気をつけろよ、その言葉が消える前に香

月は、小さくなる背中に向かって叫んでいた。

「悪いわね。どうせいつも怒ってるわよっ」

微かにサメの笑う声が聞こえた気がした。余計に腹が立って地団駄を踏む。久しぶりに聞いた笑い声は、亡くなったお兄ちゃんのそれと同じだった。

円卓の上に置かれた一枚のノートの切れ端を囲み、三人はそこにいた。

外はすでに闇に包まれていた。時計の針も一時をさしている。

「ここまであの目玉を使いこなすとは。ふん、少し槓を侮っていたな」

腕を組み、さらに足を組んでふんぞり返っているのは自ずと知れた委員長であった。その前に置かれたカップに湯気をたてた紅茶が注がれる。

「侮っていたのは槓さんだけ？」

注がれた紅茶をすすりながら、委員長はじろりと笑みを崩さぬ中川を見た。

「ま、少々油断していたのも認めなくはないがな。だが、物語がもう少しくなるのは歓迎しよう」

自分の非すら偉そうに委員長は語る。最後の一人は、さっきから手にしたラップを弄んでいた。

誰一人として、ここが図書室で、そして真夜中であることを気にしない。さも当然のように彼らはそこにいた。

「影法師、君は」

中川は最後の一人に振った。暗闇の中で彼を見つけるのは難しい。ゆらゆらと揺れる黒い影は闇にすっかり溶けていたからだ。

「何がだい。目玉が落ちたことか、恐怖の大王が来たことか」

「ほう。その二つはやはり関係があったのか」

軽く身を乗り出す委員長の目は物語の複雑さを待ち望んでいた。

「いや、ない」

影法師は興味深げに紅茶の入ったカップをのぞき、それを持った。宙に勝手に浮いていくカップに、中川はマジックショーのようだと軽く感心した。

「何故このオチャには湯気がない」

カップの底をのぞいている影法師に、冷めたからだ、と懽然とした委員長の声が飛ぶ。「クレイとは違いここは時間が一方にしか流れんのだ、影よ。そなた、こちらで生まれたのだろ。そんなことも知らぬのか」

クレイ。それはここであってここでない場所。全てが定まらず混沌としている。まるで何かに変わる前の粘土のような世界。実際、そこには名前などないが、彼らは便宜上クレイと呼んでいた。

「影法師になってから、こちらにくるのは、はじめてだからさ」

しげしげとカップを眺める影法師に、委員長はふむと頷いた。

「そうだったな。影とは不便なものよ。私と主様のようにはなれぬしな」

「そうかい。考えたこともない。『……虫もかなり大変だ。暇で仕方がない』」

影法師の中に重なった委員長の思いに、影法師は首を傾げる。くくくと、委員長は笑った。

「大変なのにそれがいいとはどういうことかな、ワーム」

「それはお互い様よ。そなたは影。私は虫。そう生まれついたらそれが一番と言うことだ。わかったかい、若いの」

委員長の姿はいつの間にか人間サイズの虫に変わっていた。幾つもある手で器用に紅茶をすする。その姿を見ても、中川は眉一つすら動かさなかった。

「目玉は目玉。それ以外を求めるのは無駄なことだ」

「付月サメのことかい」

「そなたがあれに名を与えたのは責めてはおらぬ。それはそなたの仕事だしな。だが、最近の若いのはなっていない。自分の与えられた

仕事もまともにできぬのか」

腹立たしげに数十本の手が次々に円卓を叩く。置かれたカップがカタカタと揺れ、さざ波をたてた。

「それで、なぜ目玉と大王が関係ないのかな？」

放って置いたら話はあさっての方に向かって走ってしまい、ゴールテープを逆走で切ってしまいそうな勢いであった。話を途中で取られ、不機嫌なワームの視線を底の知れぬ笑みでかわすと、影法師に話すよう促した。

「ないものはないとしか言えない。それ以外の言葉はないからね」

「なら、どうして関係を持ったのかな」

「ふん、泡はせっかちだな。真相は最後まで待たねばつまらぬぞ」

「僕はクレイの住人でも、学園の不思議でもないただの人間だからね。君たちのように悠然とはしてられないんだよ」

クレイの住人か、とワームは繰り返した。ワームも影法師も確かにクレイの住人であったといえよう。だが、ふとしたきっかけで、二人はこの学園と関わりを持ち、不思議という名目で学園に住み着いていた。

「しかし、七不思議の真相を知っているのに誰にも漏らさないのは、泡がクレイを旅したことに関係があるのか」

すぐに話がそれていくのはワームの欠点であり、長所でもあった。ワームはその名の通り虫であり、物語の余った部分を食べ取って生きている。今までこの学園で起こった事件のこともワームがその部分だけ記憶の物語をかじったので、あまり騒がれることがなかった。まあ、騒がれたとしてもリアンを使って、新しい物語に書き換えてしまえばいいし、本当に大変なときは空白の書を使って本にしてしまうのだろう。ワームも影法師も自分の平穏な暮らしを乱される時は容赦がないのだ。それ故、彼らの存在は七不思議として恐れられているぐらいがちょうどいいのである。

「そうかもしれないね。あっちから戻ってきてから性格が変わった気がするし。とりあえず不可解なことがあった方が僕も楽しいし。」

それに、そんなことしようものならまず君に食べられるのだろう。それは嫌だな」

にやっとワームは意地悪そうに口を開いた。中川の近くに風切としているのはただの偶然ではない。人間として生きるのを暇つぶしにしながら、ワームは中川の素行を監視していた。影法師と違いワームは警戒心が強かった。

「とりあえずは、影法師同様、泡を信用しよう。さて、それにしても楨の侵略はどうする？ またこの前のように本にしようかね。それとも」

「少し待ったらどうだい。まだ実害も出ていないことだし」

真っ暗な中で、ラッパだけが影法師の存在を明らかにしていた。二人はそれぞれの気持ちを表情に出し、影法師をいるあたりを見た。当の本人は先程、ワームの影となりその中の言葉を拾ったように、誰かの影となり、何か言葉を探しているようであった。

「目玉のこともある。目玉が私たちの仲間になるのかどうかかわからない。恐怖の大王もいつもの如く暴れていくだけだろう。無理に動いても意味がないさ」

「それは影、そなた個人の意見か」

ふふん、影法師は鼻で笑った。その笑い声のみ残して、ラッパは消えた。

「いってしまっただね」

「まあ、いい。我ら不思議はなれ合わない。それもルールだ。恐怖の大王いる限り、不思議が消えないように。私は私の好きに動く。なにせおもしろい物語はこの間以来だからな。もう少し七不思議を探ろうとするものはいないのかね」

「もう七不思議自体が古いのかもね」

無然とした表情で、置かれたメモをばりばり食べると、ワームもいずこかに消えてしまった。消えることのできない中川は、さて帰るか立ち上がる。円卓の上には白紙の紙切れが残されるだけであった。

そして、恐怖の大王がやってきた

次の日。学園は朝からちよつとした騒ぎで持ちきりだった。

朝一番で学校に來た各クラスの優良生徒は、各々の驚きかたでみな一様に驚きを表現した。二〇人の生徒が見たのは、教卓に散乱したスライムの哀れな姿であった。スライムは科学部が文化祭の出し物としてよく扱う代物で、洗濯のりと、魔法の粉と科学部長が妖しく宣伝する実験用の白い粉をかき混ぜてできるぶよぶよにぷにぷに感触を持つジェルである。その触感といい、着色したときの見た目といい、某RPGの雑魚モンスターにそっくりなところからこの名が付いたらしいというまことしやかな噂があるが真相は藪の中である。そのスライムが赤黒く着色され教卓に叩きつけられているのは、さながら本物の血かと思うのは無理もなかった。

学校は朝から清掃となり、一時間目も自習となった。職員会議の結果は、夏休みの開放的な気分浸った生徒の悪質ないたずら、ということになったらしい。お弁当をつつきながら、情報通の文弥の話を横で盗み聞きしながら、香月はさらに増えた夏休みの宿題のため息をもらした。今年の夏は委員会活動と宿題に追われて終わりそうだと簡単に予想がつき、またしても深く切実なため息が漏れる。「それでね。我らが楨部長がこの事件の真相を解くために立ち上がったのよ。まさしくジャーナリスト魂ってやつね」

おお、となぜか拍手が起こる。どうしてみんな騒げるのだろうか、と夏休みを前に騒げる人間を香月はうらやましく思った。ああ、私のバラ色の高校生活はどこに胃ってしまったのだろう。真面目にそんなことを考える。

（今月に入ってからろくな事がないな。今月の運勢は絶好調のはずだったのに）

毎月買っている漫画雑誌に載って占いを思い出し、バッグから取り出す。友達に貸していたのがたまたま戻って來たのだが、最後の

方にある占いのページを開く。

(やっぱり今月は絶好調だ。このうそつきめ……)

その後続く文面を香月は読み上げる。いつもそこまでは面倒で詳しく読んだことはなかった。

「大きな事件が起こるが、じっとしていればいつの間にか周りが解決してくれます。ラッキーアニマルはサメ。小物とかに取り入れて。ラッキーパーソンは、同性なら眼鏡を掛けた人。異性なら最近出会った人、か。何々、頼み事が受け入れやすい。何かお願いをするならこの月に」

腕を組んでしばらく考え込むと、もらったばかりの宿題のプリントを手にし、香月は教室を後にした。

お昼休みということで、廊下は騒々しかった。思い立って三年の教室まで来たものの、さすがに廊下を歩くのは緊張する。びくびくと小さくなりながら足早に歩く。なるべく目を付けられないようにという配慮らしい。

「高尾さん」

「はい」

呼び止められたことに驚き、背筋を伸ばす。振り向くと槇が教室の入り口に立っている。その周りには後輩とおぼしき生徒が、ノートを持って数人立っていた。新聞部の部員だろうか。香月はそう思いつつも、呼ばれたので一応会釈をし、挨拶をする。

「どうしたのこんなところで。もしかして誰か探しに来たのかしら」
誰かの所にアクセントを置き話す槇に、きつとサメのことを言っているのだらうと思いつつ、香月は頷いた。

「はい。四条先輩に宿題を教えてもらおうと思ひまして」
「幸隆に」

その意外そうな声に、香月は頷いた。占いによると最近であった異性は幸運を呼ぶらしい。またお願い事も◎とあったので、香月は四条に宿題を手伝ってもらおうと考えたのだ。

「そう。幸隆と知り合いだったの。ああ、そうね。彼、文芸部だっ

たわね。あなたと知り合いでもおかしくないわ」

「はい。委員長関係で知り合いました」

人と話すときは相手の目を見ること。年上相手ならなおのことそうすること。そう厳しく祖母から言われている香月は、そうしようといつも心に誓っていた。が、何故か槇の顔を見ると違和感を感じてならなかった。何かが違うようなそんな気がしてしかたがなかった。

「槇先輩って四条先輩と幼なじみなんですね」

変な間が嫌で、香月はそう口にしていた。

「ええ、幸隆に聞いたのね」

微笑む槇に、香月は何故か背筋が冷えた。顔は笑っているのに槇の目は笑っていないかった。それも右目だけ。槇の右目だけが笑わずに、自分を見ていた。それはまるであの目玉の形をしたキーホルダーのようだった。

「あれ、高尾さん」

隣のクラスからちようど出てきた四条の声に香月は救われる思いだった。これぞ幸いとばかりに槇に頭を下げ、そちらに向かおうとした。

「槇」

部員たちとまた話をはじめようとした槇に四条が近寄る。近づくとつれ四条の背の低さがよくわかった。槇の方が数センチだけ彼より高かったのだ。

「何かしら」

「どんな新聞を書くこうとしているのかは知らないけど、あんまり七不思議に関わらない方がいい。ここの七不思議は他の学校のように迷信じゃないんだから」

本気で幼なじみを心配し忠告をする四条に、槇の周りにいた女子生徒が一斉にくすくすと馬鹿にしたように笑いだす。槇もうつすらと小馬鹿にするように口元をゆがめた。

「そんなのただの迷信よ。男ってのは、いつも強がっているくせに

変なところで女々しいんだから。恐がりだからくだらない記事しか書けないのよ」

そうよそうよと、楨に賛同するかのように取り巻きがくすくすと小声で会話をする。気がつくとも周囲にいた人々も同じように馬鹿にした目で四条を見ていた。

「恐がりでも構わないから、七不思議にだけは関わらない方がいい。それを調べようとする決まって恐怖の大王が来て、大変な目に遭うんだぞ」

赤い唇が哀れみっぽく曲がり、ゆつくりと開く。

「かわいそうに。姉が三人もいると知らないことばかり耳にはいるのね。恐怖の大王なんて、根拠のないただの幻想じゃない。信じるだけ馬鹿みたいだわ」

いつの間にか多勢に無勢と化したやりとりにおろおろしていた香月だが、思い切って明るい声で二人に割り込んだ。半ば体当たりする形で、四条に近づくとその手をつかんだ。

「あ、先輩。すみませんが宿題のプリントで分からない所があるんで、図書室で教えてもらえませんか」

そういいながら、香月は四条を引っ張るように人だかりを抜けていく。階段を降りる頃には二人の足は、自然に駆け足になっていた。一階まで降りきると、二人はあはあと肩で息をついた。

「すみません。勝手なことをして」

「気にしないで。こっちこそ助けてもらったみたいだし」

いまだ手をつないだままだったことに気がつき、香月は慌てて手を離れた。そのことと、ありがとうと言われたことに照れたのをごまかすように、香月はいつも以上にその口をフル稼働させた。

「いえいえ、そんなたいしたことじゃないでから。それにしても、楨先輩ってあんな性格でしたっけ？ まだ数回しか話したことがないですけど、もっとこうお嬢様というか優しい話し方をする人だったような。あんな人前でねちねち言うような人じゃなかった気がするんですが」

「そうだね。どうしたんだろ。いつもなら誰もいないところでねちねち言うのに」

「え！ やっぱりねちねち言うんですかっ！」

素っ頓狂な声を上げて驚く香月に、意外だろと四条は苦笑する。素直に頷く香月に、四条は吹き出した。

「本っ当に君って正直だね。槓だって人間だから、嫌なところくらいあるよ。人前では良い子にしてるけどね。幼なじみで気心が知れているからだろうけど、僕には結構わがままできつい性格だな」

「はあ。演じていたんですね」

意外だと、香月は今まで見てきた槓を振り返る。確かに、思いでの中の槓は完璧にお嬢様を演じていたと言えば、そうなのかもしれない。だから、わざわざ初対面の一年生に図書室まで謝罪に来たのか、と香月は納得する。

「そ。一度演じ始めると外でも家でも休みなくだろ。だから、かなり疲れてたみたいだよ。好きなこともあまりできなかったみたいだし」

「へえ。大変だったんですね」

「うん。何度かやめたらって言ったんだけど。ほら、槓ってプライドだけは高いから」

「そうなんですか」

そうなんだよ、と言い返す四条は、香月のぐしゃぐしゃになったプリントを手にとると、ざっと目を通した。

「男がぐちぐち言うのって何か似合わないだろ。本当はずっと誰かにばらしたかったんだけだよ。だから、君に話せてすっきりしたよ。ありがと、高尾さん。お礼に手伝うよ、これ」

ひらひらと振るプリントに、香月は満面の笑みを見せた。これで苦手な英語と数学は何とかかなりそうだった。

「うわ、ありがとうございます。一人でやったら、絶対終わらないと思ってたんですよ。うわあ、占い様々だ」

ぴよんぴよん跳ねて喜ぶ香月に、何それと四条もつられた。

「君たち、昼休みだからってあまり騒いじゃ駄目だよ。ここは保健室にも近いんだから、皆川先生に怒られるよ」

注意され、ぴたりと香月は止まった。見ると中川が、司書室からのぞいていた。ほらほらと指さすその手を追うと、保健室よりも近い進路指導室から鬼のような形相の鬼瓦先生が、こちらを見ていた。素知らぬ顔で視線を逸らした香月たちは、逃げるように司書室に駆け込んだ。

「うーん。いつからここは駆け込み寺になったのやら」

ドアを閉めながら言う中川の言葉に、二人はすみませんと頭を垂れた。早速、二人分のお茶を用意しはじめる中川に、四条は机の上にあった空のカップを手渡した。

「誰かいらしたんですか」

香月も四条の問いに興味を持つ。委員長ならマイ湯飲みに緑茶と決まっているが、四条が渡したのはティーカップだったからだ。臭いもコーヒーのものである。

「ああ、付月君がね」

「えっ！ 何しに来たんですか。あのバカ」

「失恋したらしいよ。最近、香月君が冷たいって」

誰が冷たいと、そう顔一面に描き、香月はぐしゃりと宿題のプリントを握りしめた。

「それに、新しい男ができたらしいって。ああ、それきつと君のことでだから、気にしてあげてね」

あははは、と乾いた笑い声を立てる四条の前に、入れ立てのコーヒーを出す。香月は雑巾絞りのように四枚綴じのプリント束を硬く硬く絞る。それだけでは気持ちが収まらないのか、あげくの果てはええ叩きのように、棚をぺちぺち叩く。本を避け、木の部分だけ叩くのは本能的に委員長を恐れているからであろう。

「世界の終わりのように落ち込んでいたから、明日辺り、首を吊らないといいね」

「吊りませんから。そんなことで首吊ったら絶交しますっ」

首吊ったら絶交も何もないんじゃない、そうでかかったが、四条はコーヒーと一緒に飲み干した。あ、これインスタントじゃないや、とのんびりコーヒーの味を味わう四条は二回目にして司書室にとけ込んでいた。

「そんなことよりも、二人そろって今度は何をしていたの」

「四条先輩に夏休みの宿題を手伝ってもらいます」

「宿題って、それ」

「あああっ」

自分の手の中でぼろ雑巾になったプリントを目にし、香月はへなへなと床に座り込んだ。茫然自失。夏休みよ、さらば。そんな声が背中から聞こえてきそうだった。新しいプリントをもらいに行けばいいだけなのに、そう思ったが戻るときに教えればいいか、と四条はもう一口コーヒーを飲んだ。

「そういえば、先生。風切さんはいないんですね。いつもここにいると思っていたんですが」

「最近、休みが多いだろ。今日も当番の子が来ないんで、風切さんが様子を見に行ったんだ。多分、今頃、違う組の子でも探しているんだよ」

大変ですね、と相づちを打つも、自分から聞いた割には興味なさそうな口調だった。

「本当に多いですよ。うちのクラスも今日二桁いきましたから。先生方も大変でよね」

「そうらしいね。僕は司書だからどうでもいいんだけど」

その受け答え、学校の職員として間違っていないかと、四条はつつこみたいのをぐっとこらえて、話を続ける。香月はいまだに魂を飛ばしたままだった。

「大変って言えば、今朝の事件は何だったんですかね」

「何だったんだろうね」

ようやく核心にたどり着いたと思ったら、あっさりかわされ、四条はがくつとうなだれた。司書の中川なら職員会議にも出ているか

ら、未知の情報を教えてもらえと思ったのだが、相手の方が一枚上だった。ニコニコと顔に張り付けている中川が、この時四条には高い、高い壁に見えた。

「そうですよ。朝のあれは変です」

ようやく立ち直った香月は立ち上がり、中川に詰め寄る。

「もしかして委員長ですか。今年の夏休み特別貸出しの冊数が全体的に少ないと嘆いていたから。もしやそのせいで、あんな奇行を」

「それは違うよ」

襟元を捕まれがぐぐくと揺すられたので首を押さえた中川は、話さないと納得しないか、と観念した。それを端から見っていた四条は、そんなやり方もあるのかと感心し、冷めるともったないので、香月のコーヒーも勝手に飲みはじめた。

「面倒臭くて言っていないんだけど、風切さんのクラスはイタズラされてなかったんだって。ほら、風切りさんって守衛さんが開けると同時にクラスに直行して、いつも図書室を開けてるから。間違いないらしいよ」

「それこそ怪しいですよ。うちのクラスも何もなかったですから。やっぱり委員長が」

犯人ですと続くはずの言葉は、中川にかき消される。

「ずっといたよ。風切さんはここにね。今日は新刊の受け入れが間に合わなそうだったから、八時一〇分前には僕も学校に来ていたんだ。だから、彼女は白だよ」

それを聞いて、ホッと息をつく香月。委員長が警告も出さずに暴力に走るとは、信じたくなかったのだ。一応、警告を出してから、というところは悪役でも尊敬しているのだから。

「でも、風切さんのクラスも被害にあっていましたよね」

「ああ、そうだね。遭わなかったのは高尾さんのクラスだけだから。犯人はそのクラスかもって、担任の先生が会議で血祭りに上げられていたねえ」

四条の的確な質問に、ぺらぺらと中川はしゃべる。

「あわわ、熊先生がですか！　　可愛いそうに。名前通り熊顔だけど
気は優しくて力持ちなのに」

「高尾さん、力持ちは関係ないよ」

戯れる二人の横で、腕組みをして四条は考え込む。

「でも、それだと」

「あの委員長が来た後にイタズラされたんだろ。犯行時間は七時半
過ぎから八時までの間の三十分間といったところか」

四条の声を遮るように重なったのは不機嫌な低い声。反射的に四
条は引きつった笑いを浮かべてしまった。背後に迫るただならぬ気
配に、身の危険を感じる。男の嫉妬も女子のそれと同じくらい恐い
んだなど、頭の隅で暢気なことを考える己に乾いた笑いがこぼれる。
「や、付月君。二度目の来訪だね。どうしたの」

相手の機嫌の悪さなどものともしないで、中川は片手をひらひら
と振る。ぶすつした顔は何も言わずに香月の横に席を取った。真っ
正面には、困惑した四条がいる。

「こら、先輩に挨拶をする。質問にもさっさと答えなさい」

ぺし、とぼろ雑巾になったプリントで付月の後頭部を香月は叩く。
それだけのことなのに、付月の眉間に刻まれた皺が三ミリは薄らい
だようだ。

しかたなく「ども」と小さく四条に頭を下げると、付月は頬を
掻き、言いたくなさそうに目を泳がす。横で香月が「もたもたする
な」とぺしぺし叩いているが、それもうれしいのだろう口元が少し
あがっている。

（わかりやすいなあ。なんか飼い主に構ってもらえて喜ぶ犬みたい）
付月の体格に合いそうな大型犬をあれこれ思い浮かべる四条は、
幸せそうな顔をした。実は四条は無類の犬好きなのである。

「高尾さん、もういいよ。来た理由なんて、どうせ高尾さんの気配
を感じた、とかだから。相変わらず犬並だね。それよりも僕は付月
君の推理の方が気になるな」

あ、そうだ。香月と四条は中川に指摘されて、はじめてそのこと

に思い至った。が、無情にも昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り響いたのだった。

学校の片隅で、少年少女は集まっていた。一人を取り囲むように輪になって、地面に座る少女を皆一様に見下ろしている。その表情は能面のように、感情は何えなかった。その輪から一人、その少女の元に歩きだす。その後には黒い靄が煙のようにたなびいていた。手にしたカッターを少女に向け、赤すぎる唇が開かれる。

「裏切り者に制裁を」

静かな口調だが、それを合図に輪になっていた生徒たちが動きだす。一人少女は恐怖に顔を歪め、震えるしかなかった。

その異様な光景を、学校の屋上から見ているものがいた。一人は手すりに座って、もう一人は手すりに頬杖をついてその様子を眺めている。

「とうとうはじまったな」

「……」

テレビで流れるどこかの内紛の映像と変わらずに、傍観を決め込む。委員長は熱風のせいで顔に張り付く髪を後ろに流すと、何も語らない影法師を見た。

「『時は満ちた』……ふむ。彼らしい言いぐさだ」

手すりの上に立ち上がった影法師は、眼下の惨状など気にもとめずに笑った。ふふん、とあの時と変わらぬ笑いで。

「懐かしの対面というやつか」

眼鏡をあげる風切のスカートの裾を突風がさらった。

見上げた空に黒雲が広がっていく。

恐怖の大王の先触れである。

その日、香月は夢を見た。

学園近くの雑木林の中で、何人もの少年少女が集まっている夢だ。誰を見ても着ているのは、花紫学園の制服である。なぜ自分がそんな場所にいるのかわからずにとまどう。生徒たちは輪になり、一人ずつ前にでて、何かを振り上げると、祈りを口にし、それを地面に振り下ろしている。神事か何かだろうか。輪の外、少し離れたところにいる自分にはよく見えなかった。一步、二歩と輪に近づくにつれ、香月は違和感に気がついた。いつもより視界が高いのである。普段なら見上げているはずの男子生徒が、今は自分より少し低かった。不思議に思い両手を見た。その手は明らかに自分のものではない。指は長く、ごつごつとしている。よく見ると制服も男子のものだ。

『これは夢だ。だから気にするな』

いつか聞いた誰かの声がした。なぜだか知らないが、いまならその声が誰のものかわかる。これは、サメの声だ。

本当にこれは夢なんだろうか。不安が胸にあふれかえってくる。誰かに夢だと言ってもらいたくて、輪に駆け寄り、香月は声を上げた。その声もサメの声だった。

目に飛び込んできたのは、輪の中心に置かれたもの。それはどう見ても女子生徒だった。輪になった生徒は一人一人、その少女に向かって刃物を突き刺していく。一差しで殺さないように、手や足をめがけて、何度も差していく。

うわずった声を上げ、後ろに下がると香月は誰かにぶつかった。振り返ると、笑みを浮かべた槇が香月の背を押す。抵抗するまもなく、香月は輪の中に入れられてしまう。

恐怖を大王に

そう叫びながら、柔らかい少女の太股にカッターを差す女子生徒。その顔に香月は見覚えがあった。それは、四条に宿題を教えてもらいに行ったときに、槇のところにいた新聞部の生徒だった。そして、刺されているのは。

『文弥さんっ』

目を見開き恐怖に歪んだ口から、言葉ともつかない声が漏れる。

『付月サメ。来ると思ったわ』

白いというよりも土気色に変わっていた槓の手が伸ばされる。

本能的に後ろに下がると文弥にぶつかった。それに気を取られていると、槓の手が顎をつかみ前に向かされる。死人のような顔を見た瞬間、腹部に衝撃が走った。

『この目を手に入れたときから。あなたを殺してみたかったの』

離れていく槓。その手は片方だけ真っ赤に染まり、香月とひもでつながっているかのように、内蔵をつかんでいた。力が抜け、崩れ落ちる世界に、槓のころころという笑いが重なった。あとは真っ暗で何もわからなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1686q/>

サメと私と、七不思議。

2011年1月15日00時11分発行